

第7節 総括

三内丸山遺跡では、平成4～6年(1992～1994)までの運動公園整備事業に伴う記録保存目的の発掘調査以降、新たに「発掘調査計画」を策定し、保存目的の発掘調査を行ってきた。この「発掘調査計画」は青森県教育委員会が設置した三内丸山遺跡発掘調査委員会で議論・検討し、文化庁の指導の下に策定したもので、概ね10年毎の発掘調査計画を示しており、現在第3期計画の途中にあたる。発掘調査計画では、これまでの発掘調査の現状と課題を整理した上で、発掘調査の目的を明確にし、特別史跡であることから遺跡保護を念頭に置いた調査方法等についても述べてある。

「発掘調査計画」によると三内丸山遺跡における発掘調査の目的は大きく「集落の全体像」及び「人と自然の関わり(環境史)」を解明することにある。この点について、これまで行われてきた発掘調査、整理作業、報告書刊行等について、長く三内丸山遺跡の発掘調査や整備事業等に関わったものとして総括する。

1 調査成果と調査目的の達成について

(1) 集落の全体像の解明

集落の全体像とは、具体的に集落の範囲、集落構造、その変遷といった内容を含むものである。三内丸山遺跡は前期中葉から中期末葉にかけて長期間継続した拠点集落であるが、その間、集落構造は一定ではなく、時代(時期)によって変化することがこれまでの発掘調査で明らかとなっている。また、広大な遺跡について全面発掘調査を行うことも現実的な話ではない。したがって、三内丸山遺跡の発掘調査で当面解明できるのは中期の集落に関することになる。

前期についてはこれまでも繰り返し述べているとおり、中期に本格に形成が始まる南北の大規模な盛土を除去しない限り、集落構造を明らかにすることはできない。盛土は三内丸山遺跡のみならず円筒土器文化圏においても特徴的な遺構であり、出土遺物も膨大であるため、遺跡保護の観点から必要最低限の発掘調査に止めるのが当然である。三内丸山遺跡は特別史跡であり、遺跡の価値を損ねることなく後世へ確実に伝えなければならないことから、この点については疑問を挟む余地はない。将来において非破壊で地下遺構の状況が把握できる画期的な方法が開発されない限り、安易に発掘調査を行うことは許されない。

さて、中期の集落については、運動公園整備事業や都市計画道路整備事業に伴い大規模な発掘調査が行われたこともあってその内容が把握されているものの、依然として発掘調査の及ばない未調査区が存在することも事実である。未調査区を解消するため計画的に発掘調査を行い、整理作業や報告書刊行を通じて明らかとなったことについてこれまでに得られた知見を加え整理する。

①中期前葉

基本的には北地区に集落は展開し、列状墓(道路を含む)や南・北・西盛土の形成、大型掘立柱建物、中央部の掘立柱建物の構築が本格的に行われる。貯蔵穴も一定の場所に集中する。前期末葉から集落の拡大の傾向が見え竪穴建物数、土器や土偶なども増加する。

②中期中葉

集落は大規模となり、一気に南地区、近野地区へも拡大する。北地区においても丘陵全体に広がる。列状墓、各盛土、掘立柱建物の形成や増築が最も盛んに行われる。竪穴建物数も最も多い。具体的な集落構造については前節で述べているのでここでは省略する。

③中期後葉

集落は引き続き大規模であり、その範囲はほとんど変わらないものの各遺構の分布密度はやや低下する傾向にある。列状墓には、確実に環状配石墓が加わり、各盛土の形成、大型掘立柱建物、掘立柱建物の構築も行われるが、最花式期を最後にこれらの形成、構築は終わる。すでに土器は東北部の影響を受けた榎林式、最花式と変遷するが、集落構造は前段階と同様であり、劇的に大きく変化することはない。

④中期末葉

これまで大木10式併行期についても中期後葉の中に入れて集落構造を検討してきたが、最花式から大木10式併行期にかけて大きな画期が認められるため、あらためて中期末葉として記述することにした。

まず、層序では最花式に見られた暗褐色土は見られず、肉眼的には黒ボク土と呼べる黒褐色土の形成が始まる。暗褐色土は人為によるものと考えられているが、この黒褐色土は微粒炭を多く含んでおり、後世黒色土化したものではなく、最花式から大木10式併行期にかけて、土壌が大きく変わるほど環境の変化があったことが推測される。集落そのものも規模が縮小し、集落構造も大きく変化する。再び北地区を中心に居住域が点在するようになる。環境の変化と集落構造の変化が連動しているように思えるが、それが一時的な寒冷化によるものかは現時点では判断できない。

以上については把握することができた。一方で課題もまた顕在化してきたといえる。例えば、中期中葉の集落の大規模化に伴って見られた、複数の居住域の存在について、土器型式での同時性は確認できたとしても厳密な意味での同時性を保証するものではない。このことは、集落の大規模化やその後の縮小化の過程を考える上で、居住域を同じくするグループの集合体の規模や数が集落規模と密接に関係するかどうか重要である。また、縮小化に関しては、岩手県一戸町御所野遺跡に見られるような中央広場を中心とした居住域の分散との関連性の有無も重要である。御所野遺跡では周辺集落の拡散・分散と同時か先行して同じ集落内で居住域の拡散の傾向が見られる。三内丸山遺跡の終焉と御所野遺跡の開始は時間的に近接しており、円筒土器文化圏の消長を考える上で重要な視点となる。

個々の遺構では、捨て場と盛土の問題がある。基本的には前期は捨て場、中期は盛土と現時点では整理している。両者ともに一定の空間的広がりを持ち、大量の遺物が廃棄されることから、目的や用途を考える必要がある。完形ないしは復元可能土器が目立ち、一見して不用品を廃棄したものではないことは明らかである。石器について完形品が多いものの、破損したものや、石棒や石皿類のように原型を止めないほど破壊されたものも含まれている。前期においては祭祀遺物がそもそも少ないものの、小型土器や前期末には土偶も出土し、さらに複数土器型式にわたり形成される場合もあることが

ら、意味のある施設として考える必要がある。

中期において前期の捨て場との違いは年代もさることながら大量の土砂の廃棄の有無による。盛土は各種遺物が土砂によって埋められていることに特徴がある。捨て場・盛土ともに廃棄の連続により形成されるが、その廃棄単位を捉えるのは非常に難しい。中期では土砂の廃棄が伴うため、廃棄単位を捉えることは可能だが、その過程はあまりにも複雑である。まるで貝塚の貝層における廃棄単位を捉えるのと同様である。また、中期では祭祀遺物も多様となるため、土偶に代表されるように集落内では突出した出土量を示す。さらに石甌のように、廃棄に時間的な差があっても同一地点を選んだような出土状況を示す場合もあり、その空間への執着が感じられる。

しかし、祭祀・儀礼に使用したと考えられる道具類を埋めてはいるものの、その場で実際の行為が行われたかどうかははっきりとしない。三内丸山遺跡では北・南盛土については廃棄の連続によって形成されるが、西盛土では盛土層中に焼土が形成されているものがあり、実際にその場で火が燃やされたものと考えられる。

捨て場・盛土ともに各種遺物の特異な出土状況から注目されてきた。発掘調査の事例も増え、最近では捨て場・盛土の目的を後世のアイヌ民族に見られる「送り」と同一視する風潮が高まっている。北海道内では捨て場や盛土の中から、墓や動物儀礼の痕跡が見られるなど確かに類似する要素が多いことも指摘される。県内においても、捨て場と小児用埋葬施設が重複する場合や三内丸山遺跡の西盛土では盛土・土坑墓・道路が共存する場合があり、葬送とも密接な関係があるようにも見える。

盛土の目的を検討する前に、まずは盛土の定義を明確にする必要があるとともに、実際に発掘調査された「送り」の場と比較するなど、さらに検討を重ねる必要がある。

以上のように集落の全体像の解明は一定の成果があったものと考えられる。

(2) 人と自然の関わり (環境史) について

これまで辻誠一郎を中心に環境復元が試みられてきた。辻は花粉分析等の植物遺体の諸分析による環境復元にとどまらず、集住と生活、生業に範囲に関する様相を三内丸山集落生態系と呼び、その解明に意欲的に取り組んできた。その点については辻の論考(第5章第6節第2項)を参照されたい。

これまで得られた膨大な資料を踏まえ、辻は集落とその周辺環境までを含めた環境変遷を示した。それによると、集落が成立したころには海岸線はすでに後退しており、陸奥湾と集落の間には沖館川低地が形成され、当初想定されていた干潟はなく、現在とはほぼ同じ距離であったことを指摘した上で、沖館川を通じて集落と陸奥湾が繋がっていたとし、このことは西本豊弘や樋泉岳二らによる魚骨等の分析からも陸奥湾内における多様な水産資源の利用を裏付けるものであるとした。これまで、地形的観点から縄文海進期の海岸線は推定されていたが、縄文海進の年代が詳細に把握されるにつれて三内丸山遺跡における集落の形成以前にすでに海進期のピークは過ぎ、海退期に入っていた可能性は高いと考えられる。

一方、青森平野では円筒下層 a 式の出現と同時にクリ林が急速に拡大したことを指摘し、三内丸山集落において確認された同様の状況が広範囲にわたって起きていたことを示し、円筒土器文化の成立と十和田火山の大規模な噴火とが密接な関係にあるとした。集落形成以前、三内丸山周辺一帯はブナやドングリ類などの北方ブナ帯と呼ばれる落葉広葉樹林であり、居住開始とともにこれらは衰退し、

クリが優位となり大半を占めるようになる。ブナやドングリなども有用な食料資源であったが、結果的にクリに置き換わり、クリ林が成立したとし、このことは人為によるものとしている。このような植生環境を「縄文里山」と定義した。さらに集落の終焉とともに再びブナ林に戻ったとも指摘している。

円筒土器文化の成立・発展した背景として、基本的な植生環境としての北方ブナ帯と縄文里山の存在がある。北方ブナ帯は縄文時代において北海道南部まで広がっていることがすでに指摘されており、円筒土器文化圏のほぼ北限とも重なる。北方ブナ帯は世界自然遺産白神山地に代表されるように生物多様性に富み、ブナやクリ、クルミなど有用な食料資源にも恵まれている。東北部では北方ブナ帯が山地にとどまらず、海岸線まで分布し、人間の活動領域に近接もしくは包含する状況となっており、このことは縄文人にとって生物多様性に富んだ資源を利用できる格好の機会を提供することともなった。さらに十和田火山の噴火によって、この植生環境が大きなダメージを受け、その中から最も早く復興した堅果類を積極的に利用することによって、一気に円筒土器文化の成立を促進させた可能性は高い。今後においては、直接的な噴火の影響が軽微であった地域との比較検討をさらに進めることによって、これまで提示された仮説をより補強することになるものと考えられる。環境史については、集落形成以前から集落の発展、終焉まで、高精度年代測定の結果による時間軸が設定され、詳細な環境変化、辻の言う三内丸山集落生態系の変遷について大きな成果が得られたものと言える。

さらに辻が指摘しているように、集落の変遷と環境変化は連動する。このことについては筆者も以前指摘したことがある。今後の課題として、より詳細にこの点について検討する必要があり、少なくとも集落の形成、大規模化、拡散・分散化、終焉など、三内丸山集落史と環境変化の相関について、ひとつの遺跡、ひとつの集落の視点だけではなく、青森平野や円筒土器文化圏の中での検討も欠かすことができないとも考えられる。

なお、クリに関しては人間活動が密接に関わることから、鈴木三男、南木睦彦、佐藤洋一郎などがそれぞれの専門的な立場から栽培の可能性を指摘している。円筒土器文化の北海道への進出とともにクリが増加することも人間活動との密接な関係そのものを示している。今後多様な植生環境の中でクリが選択された理由について考古学や民俗学的なアプローチを今後とも続けていくことが必要と考えられる。

2 その他の成果について

(1) 円筒土器の成立と終焉

長谷部言人が命名した円筒土器は、上層式と下層式に大別された後、山内清男は下層式を前期に、上層式を中期に位置づけ、円筒土器下層式をa・b・c・dの4類に分類し、編年の序列を提示するとともに、上層式については2つ以上に分類できることを指摘した。江坂輝弥は青森県八戸市蟹沢遺跡出土を分類し、前期末の円筒下層d₁式と中期初頭の円筒上層式を繋ぐものとして円筒下層d₂式を設定し、秋田県の大和久震平は円筒下層d式と円筒上層a式をつなぐものとして狐平式を提唱した。

さらに江坂は青森県つがる市石神遺跡の発掘調査報告書において、下層式を7型式15類に、上層式を7型式10類に細分し、その後円筒土器文化研究の第一人者である村越潔は「円筒土器文化」において下層式をa・b・c・d₁・d₂式の5型式6類に、上層式をa・b・c・d・e式の5型式2類とした。こ

こに円筒土器の編年はほぼ確立し、その後この村越編年が定着することとなり、土器の細分が進んでいる現在においても基本的には変わってはならず、村越編年についても大幅に修正する状況にはない。

円筒土器の成立と終焉について長年の課題があり、どちらも東北部を中心に分布する大木式土器の影響を受けていることは間違いなく、大木式の編年や細分とも関係する。

まず、成立については円筒下層 a 式の内容を明らかにすることが必要である。このことは後続する円筒下層 b 式との分類基準を明確にすることでもある。当初山内によって設定された段階においても、その根拠となる基礎的な資料がしばらく公開されていなかったこともあって、内容が不明確なまま取り扱われ、研究者によってその理解が大きく異なってきた。

また、両型式が明確な層位的な上下関係を持って出土した遺跡がないこともあって、その混乱に拍車をかけることもあった。したがって、下層式前半の土器が出土してもそれぞれ分離されることなく円筒下層 a 式・b 式を一括して発掘調査報告書へ記載され、また、研究者の理解不足から誤った記載がされることも少なくなかった。しかしながら、昭和60年代以降、良好な資料が増加し、この問題についての研究が大きく進展した。

終焉については、江坂は当初円筒上層 f 式を設定し、円筒土器文化の中で理解しようとしたものの、村越は円筒上層 f 式を円筒土器とは見なさず、円筒上層 e 式を円筒土器の最後に位置づけた。この考えは現在でも支持されているが、円筒上層 e 式以降の榎林式（大木 8 b 式併行）への変遷過程が十分に解明されていないこともあって、結論に至っているわけではない。

土器そのものでどこまで文化全体を規定できるのか、他の遺物や遺構などの要素について土器編年と同じように詳細な変遷が把握可能となった現在では、総合的に検討の上、円筒土器文化の成立と終焉についてもさらに検証の必要があろう。

また、山内により下層-前期、上層-中期とする時期区分についても、円筒下層 d 式を細分される形で d₂ 式が型式設定された経緯もあり、前期末の年代観を与えられてきたものの、土器以外の堅穴建物の構造の変化や土偶の増加など、文化的にはこの段階に大きな画期が認められることは確実である。円筒上層 a 式を中期初頭に位置づけて良いのかという問題もあり、広域編年における北陸地方との併行関係など課題が少なくない。円筒下層 d₂ 式を中期初頭に位置づけることも検討に値する。

①円筒下層 a 式と b 式の分類基準

三内丸山遺跡の発掘調査では両者の分類基準や変遷について層位的に確認されている。第6鉄塔地区では、縄文時代前期は低湿地、前期末以降の上層は盛土遺構となっており、円筒土器全型式が出土している。調査を担当した小笠原（青森県教育委員会1998）によると、円筒下層 a 式・b 式は上位から第 V b 層、第 V c 層、第 VI a 層、第 VI b 層から出土し、その特徴を見ると漸移的な変化を示しており、このような状況が円筒下層 a 式と b 式の区分を困難にした大きな要因であると指摘している。

具体的には主に①口縁部文様帯に結節回転文、胴部に斜行縄文施文、②口縁部文様帯に結節回転文+単軸絡条体の混在、胴部に縦走縄文+単軸絡条体 1 類、③口縁部文様帯は単軸絡条体主体、胴部も単軸絡条体 1 類が主体、の変遷となり、②の段階で口縁部文様帯が確立、分化したと言う。つまり、第 V b 層は円筒下層 b 式の新段階、第 V c 層は典型的な円筒下層 b 式、第 VI a 層・第 VI b 層ともに円筒下層 a 式であるが、第 VI a 層については円筒下層 b 式への過渡的な様相を示すものとした。

なお、従来円筒下層 a 式・b 式の分類基準としてきた、底部への縄文施文や口縁部文様帯の隆帯は適切ではないこともあらためて指摘していることは重要である。これについてはすでに三宅（三宅 1989）も指摘していることでもあり、それを層位的に追認したものである。他に函館市八木 A 遺跡や戸井貝塚、つがる市田小屋野貝塚でも同様のことが指摘されている。

円筒下層 a 式・b 式の分離は工藤大（工藤 1995）が指摘しているように、山内による型式設定の際に口縁部文様帯に施文される結節回転文に着目し二分されたきわめて一体性の強い土器であり、層位的にも明確な上下関係を持って出土する例が少ないことも影響し、曖昧なまま現在に至っている。新たな要素や属性の有無といった観点での分類ではなく、山内が指摘しているように型式は比率の変化であるということに留意し理解することが現段階では適切であるという指摘に止めておきたい。

②円筒土器の出現と円筒土器文化の成立

従来のように円筒下層 a 式の出現をもって、円筒土器文化の成立とすることに対して異論はないが、むしろ円筒土器特有の技法が顕著となる円筒下層 b 式以降がよほど円筒土器という名称にふさわしいと言って良い。

下層 a 式は口縁部文様帯に結節回転文を施文する土器群であるが、このような手法は大木式からの移入であると工藤大は指摘している。さらに階上町白屋遺跡においては結節回転文と縄の側面圧痕を併用する例があり、これについては在来的な手法であるとしてもいい。下層 a 式前半は口縁部文様帯も狭く、結節回転文も 2～3 条巡らしていたものが、円筒下層 a 式後半には器形の長胴化に伴い、口縁部文様帯も広くなり、施文文様も多様となる。この段階をもって大木式の影響から明確に分離されるとともに円筒下層 b 式以降の在来的な縄の側面圧痕を多用することでいわゆる円筒土器様式は確立するものと言える。ただ円筒土器の最大の特徴である、口径と底径の差が少ない器形は円筒下層 a 式になって見られるものであり、この特徴の出現をもって円筒土器の成立とすることについては基本的に正しいものと理解できる。

しかしながら、円筒土器直前の早稲田 6 類や芦野 II 群、深郷田式土器、いまだその編年の位置づけがはっきりとしない発茶沢（2）遺跡出土の結節回転文施文土器との関連性についてはさらに検討する必要がある。

また、辻や茅野嘉雄は十和田火山の噴火に伴う中振火山灰より上位で円筒下層 a 式が出土することから、十和田火山の噴火と円筒土器文化の成立は密接な関係があるとし、茅野は円筒下層式以前の諸土器型式を伴う地域文化圏が噴火により壊滅的な打撃を受け、それらが統合されるように一気に円筒土器文化が成立したとしている。これまで円筒土器以前の土器については資料が少なく、確認できる土器型式を一系統として整理し、編年の序列を与えることについての懐疑的な意見を示したというで注目される。以前から県内の研究者の間では、在地の小土器文化圏の統合という経緯の中で、円筒土器文化の成立が語られることはあったが、その要因を大規模火山噴火に求め、環境の劇的変化が円筒土器文化の成立をもたらしたという見解は新鮮である。しかしながら、火山噴火の年代と円筒下層 a 式の歴年代が年代測定の上ではほぼ一致としても円筒土器文化以前の諸土器型式の時間幅を考えると、円筒土器文化の成立とはやや時間的空白があり、さらに検討を進める必要がある。

③大木式との併行関係

円筒土器と大木式土器との併行関係について、発掘調査で確認された共存関係としては前期の円筒下層a式ではきわめて少ない。白座遺跡では円筒下層a式と大木2a式の特徴を持つ土器が一緒に出土し、ほぼ同時期と考えられている。円筒下層b式では秋田県上ノ山Ⅱ遺跡で大木4式と、円筒下層d式と大木6式の併行関係が確認されている。中期では円筒上層b式が岩手県西曾根遺跡で大木7b式と、円筒上層c式は岩手県古館遺跡では大木7b式と、円筒上層d式は岩手県西田遺跡で大木8a式と併行することが確認されている。

これまで前半の円筒下層a式との併行関係については大木1式、2a式、2b式などと併行する諸見解が示されているものの、確定はしていない。円筒下層b式以降、円筒上層e式までの併行関係については土器型式の認定の問題もあって細部では違いが見られるものの大筋では矛盾のないものとなっている。

なお、北海道道南地域では複数の土器型式が同一の堅穴建物から共存する例が知られている。蛇内遺跡では円筒上層b式・c式・d式が、森越遺跡や権現台場遺跡では円筒上層b式・c式が、オバルベツ遺跡では円筒上層b式・c式・d式が確実に共存して出土している。このような複数の土器型式が同時存在する事例は本州では確認されていない。このことは、土器の型式変化が道南と本州では時間差があることを示しており、土器型式の情報発信源と受容先とがあることも考えられる。時期毎の遺跡分布を見ても青森県を中心に円筒土器は成立したことはほぼ確実であり、なぜ北に向かった情報のみにこのような現象が見られるのか興味深い。少なくとも中心地域と外縁部では土器型式の変化、情報の変化にタイムラグが生じている可能性は高い。

なお、参考まで平成24～26年にかけて、三内丸山遺跡保存活用推進室が行った『円筒土器文化総合研究データベース作成』の成果として各地域の土器型式との広域編年案を示す。

円筒土器文化データベース土器編年案

		岩手・秋田			青森		道南		北海道		道央	
前期	前期	大木1							石田野		瀬文	
		大木2a							春日町(朝法草)		静内(野付ビノ)	
		大木2b	白座						大沢川		加茂川(静内(中野))	
	中期	大木3										
		大木4										
		大木5a										
	後葉	大木5b										
		大木6(古)										
		大木6(新)										
		大木7a										
中期	前期	大木7b										
	中期	大木8a										
	後葉	大木8b										
		大木8c										
		大木9										
	大木10											



図 5-130 円筒土器出土遺跡

(2) 円筒土器文化について

三内丸山遺跡の集落構造の変遷を考えるにあたって、周辺集落との関係も重要である。ひとつの集落の消長は周辺集落と相関関係にあるといつてよい。あるいは円筒土器文化圏の中での集落の動向といった視点も欠かすことはできない。三内丸山遺跡保存活用推進室では、平成24～26年にかけて、「円筒土器文化総合研究データベース作成」を進め、筆者也参加する機会を得た。この研究は円筒土器文化の現状を把握することを目的に、集落遺跡を対象として、悉皆的な報告書の内容確認を行い、集落の時期や遺構・遺物に関する情報を集成したものである。この研究を踏まえ以下の点について若干の考察を加えることとする。

① 円筒土器文化圏における遺跡分布の傾向

円筒土器文化研究の第一人者である村越潔によると平成24年度に刊行した『青森県史 別編 三内丸山遺跡』において、円筒土器出土遺跡は257遺跡確認され、前期207遺跡、中期146遺跡とした。本研究では1,117遺跡、前期697遺跡、中期618遺跡を確認し、その数は4倍強となった。

さらに、その分布範囲は円筒土器文化成立期より主要な分布圏は不変であるとしている。北限は石狩低地帯で遺跡数はやや少なく、青森県全域、岩手県馬淵川・新井田川流域以北、秋田県米代川以北の北緯40度より北側に濃密に分布する。つまり時期毎に分布範囲は大きく変わらず、河川や脊梁山脈を越えて空白地域への進出などは見られるものの、成立当初から円筒土器文化圏は常に一定の領域を保持していると言える。

しかし、遺跡数は時期的に大きく変動する。前期後葉に最も多く、中期中葉にはほぼ半減する。前期中葉を成立期、前期後葉を増加期、中期前葉を安定期、中期中葉を集約期と呼ぶこともできる。この遺跡数の増減は各地域における集落の集約や拡散・分散化といった状況とも符合する。この点については『特別史跡三内丸山遺跡年報-19-』を参照されたい。

今後、このデータベースを活用して、集落、集落を構成する各種遺構、土偶などの出土遺物の編年や地域性といった視点での研究の進展を期待するものである。

②青森平野における集落の動向

このデータベースを活用し、さらに最近の発掘調査成果をもとに集落の傾向を表に示した。これによると、青森平野西部の沖館川流域、平野東部、平野南部の3地域に円筒土器文化の集落は分布することがわかる。さらに前期中葉には青森平野西部の沖館川流域に小中規模集落の集中が見られ、後葉では東部と南部でも中規模集落は増加する。中期前葉には三内丸山周辺以外にはほとんど集落は見られなくなり、規模も小さくなる。三内丸山遺跡とその周辺への集中傾向を示していると考えられる。中期中葉では、集落数は減少し、東部や南部では小規模集落しかない。三内丸山遺跡が最大規模となり、周辺に小中規模集落が分布していることから沖館川流域の集落の集中化が顕著となるなどの傾向が見える。つまり三内丸山遺跡は集落成立期より一貫して青森平野における中心集落であり、中期中葉にはさらに大規模集落として顕在化し際だった存在となる。なお、八戸市域では三内丸山遺跡のような長期継続する遺跡は見られず、是川一王寺遺跡、是川中居遺跡がその可能性があるものと考えられる。また、小中規模集落も時期毎に転々と移動している様相も明らかとなっている。

次に土器型式を指標として集落の存続期間について見る。なお、土器型式は一定の存続期間がある

表 青森平野における集落の動向

時代	遺跡名 型式名	三内丸山	孫内	三内	酒渡小谷(3)	酒渡小谷(4)	二股(2)	三内雲圍	三内沢部(1)	石江	三内丸山(6)	三内丸山(9)	近野	四戸橋(1)	朝山(3)	朝日山(2)	山吹(1)	新野野	野木(1)	横内(2)	横内(1)	桜峯(1)	大谷沢野田(1)	玉清水(1)	置沢	福山(1)	宮田館	上野沢		
		縄文時代 前期	円筒下層a式																											
	円筒下層b式																													
	円筒下層c式																													
	円筒下層d式																													
	円筒下層e式																													
縄文時代 中期	円筒上層a式																													
	円筒上層b式																													
	円筒上層c式																													
	円筒上層d式																													
	円筒上層e式																													
	大木式 系土器																													
	椀林式																													
	蕨花式																													
	大木10式併行																													

ことから、この表における集落の存続期間の連続性そのものを必ずしも担保するものではないことに留意されたい。

この表を見ても三内丸山遺跡は際立った連続性を示しており、類似の傾向を示すものはない。また、前期で終わるもの、中期になって形成するものなど、前期から中期にかけて連続するものも意外と少ないことがわかる。さらに円筒土器文化の最終にあたる円筒上層e式で終わる集落が多く、後続する榎林式期や最花式期まで継続するものは三内丸山遺跡と隣接する近野遺跡（時期によっては三内丸山集落の中に含めて考えるべきとの指摘もある）のみであり、三内丸山遺跡以外に榎林式以降新たに集落が形成されることはなく、円筒上層e式期と榎林式期では連続性は三内丸山遺跡以外では見られない。逆に拠点集落のみに円筒土器文化以降の土器型式による集落が確認でき、やはり拠点集落のひとつの性格、側面を示しているものと考えられる。

円筒土器文化が終わってもなお、継続して集落が営まれることは文化の連続性や終焉をどのように規定するかという大きな問題的にも繋がるものである。

当初、三内丸山遺跡は周辺に衛星的な集落を抱えた集落、あるいは子村と母村から構成される集落として理解されていたが、周辺集落の発掘調査が進んだこともあって、集中型居住によって大型化、大規模化したといえ、終焉に際しても拡散・分散化によるものと理解するのが妥当と考えられる。ただし、この拡散・分散化の要因が何であるかはさらに検討を要する。また、そもそも三内丸山遺跡に集中居住する要因についても不明点が多い。ただ、集中居住が、遠方との交流・交易の活発化、盛土や大型掘立柱建物の構築、土偶や祭祀遺物の増加、など集落における社会の成熟、社会規律の明確化に大きく貢献したことは確実にであろう。

3 三内丸山遺跡と文化財保護

三内丸山遺跡は佐賀県の特別史跡吉野ヶ里遺跡と同様に記録保存から一転現状保存された国内でも希有な遺跡である。遺跡の規模や内容はもちろんだが、保存に至る経緯も含めて、「西の吉野ヶ里、東の三内丸山」と称される由縁でもある。進めていた野球場建設工事の中止、発掘調査の原因となった運動公園整備事業の見直し、現状保存後の遺跡の保存・活用等、県にとっても大きな決断と課題解決が求められることになった。遺跡の整備・活用に関してはこれまでも様々な機会を通じて述べてきたので、ここでは発掘調査や整理作業等に関して、どのような取り組みがされてきたのかを紹介する。このことは今後の遺跡の保存・活用を考える上で重要な示唆を与えるものと考えられ、あえて取り上げることにする。

(1) 発掘現場の積極的な公開

安全性を確保した上で、見学通路を設定し発掘調査が行われている間は常時公開している。通常、市民が発掘現場を見る機会はきわめて少ない。現場を見学することによって、発掘調査の方法や状況を直接理解していただく格好の機会である。遺跡見学者から寄せられた意見でも実際の発掘現場を見たいとの声は大きい。確かに衆知の中での発掘作業は、調査担当者や発掘調査作業員の負担は少なくないかもしれないが、それ以上の効果が期待できることを認識しておくべきである。ただし、このことは全ての発掘調査に該当することではなく、記録保存の場合には適さない状況もある。しかし、保

存目的の調査は初めから公開を前提として発掘調査計画の策定や方法を検討するくらいの意識の改革が必要である。

(2) 毎日の現場説明会

発掘現場の公開は確かに遺跡への興味関心の高まりが期待できるものの、直ちに遺跡の理解にはつながらないこともある。三内丸山遺跡では、発掘調査が行われている日は毎日定時の現地説明会を行っている。また、必要な見学資料も作成することもある。発掘担当者が自ら説明することは、遺跡の理解を一層進めることはもちろんだが、説明者の発掘調査の現状の整理や説明内容の検討など文化財保護行政に関わる人間の基本的な資質向上にも好影響を与えることにつながる。いくら考古学的に貴重な成果があったとしても専門家や研究者以外にも伝わるように務めることが不可欠である。遺跡は専門家だけのためにあるのでは決してない。

(3) 調査成果の速報展示

調査終了後においては成果を速やかに市民に向けて目に見える形で発信することが必要である。成果をまとめた正式な発掘調査報告書の刊行までは多くの時間と労力を要する。その間、何もしないということは保護側の怠慢とも言える。より速く、わかりやすく、質の高い情報を提供することを心掛ける必要がある。展示の準備作業を通じて担当者自身が課題等を整理する良い機会ともなる。

(4) 特別研究の推進

継続的な発掘調査や調査研究を進めるにあたって、さまざまな課題等が生じるが、それらの中には三内丸山遺跡の成果だけでは解決できないことも多々ある。周辺遺跡はもちろん同種同時代の遺跡、同じ地域文化圏の遺跡、他地域文化圏、場合によっては海外の事例も参考にする必要がある。三内丸山遺跡では平成8年度から特別研究推進事業を進め、三内丸山遺跡や縄文文化に関する研究テーマを設定し、公募、採択し、研究委託を行ってきた。その概要については年報やホームページで紹介している。

最近では三内丸山遺跡保存活用推進室が中心となって、共同研究に取り組んでいる。平成24～26年には「円筒土器文化総合研究データベース作成」を行い、今後の研究を進めるための基礎的な情報収集と整理を行った。この成果についても年報・ホームページで紹介しているので参照されたい。

とかく、文化財保護行政において担当者個人の専門的な資質・能力に依存する調査研究が多い中で、組織的、継続的な調査研究を進めるためのひとつのモデルである。人事異動があっても、専門家による委員会の世代交代があっても遺跡はなくなる。1地点の発掘調査を終える度に、解決されるものもあれば新たに出てくる課題もある。そもそも遺跡の保存・活用を支えるのは専門的な調査研究の継続が不可欠であり、それができる環境づくり、人材の確保、体制整備が必要であることは肝に命じておくべきである。

(5) その他

これまで紹介した以外に、遺跡報告会、ホームページでの発掘調査の進捗状況の提示など行うのは

当然である。見学者やマスコミへの対応など、行政として適切な対応をとることは言うまでもなく、今後においても一層の説明責任が求められることは必至である。その積み重ねが、遺跡を支える人材の育成に大きく貢献することは間違いない。保存・活用には様々な視点があるが発掘調査やその後の調査研究に限って私見を述べた。

4 終わりに

総括報告書の刊行にあたって、すでに刊行されている第1分冊を事実記載とすれば本編はその考察編とも言うべきものである。本編は発掘調査担当者や整理事業担当者、円筒土器文化に造詣の深い研究者、三内丸山遺跡発掘調査委員会委員らの執筆によるものである。執筆内容において執筆者自身がこれまでの発掘調査や研究成果を踏まえ、自身の見解を明確に述べているため、細部では意見や見解の相違、用語等の齟齬が見られるものの、現時点での最新の成果を明らかにしたものであり、今後の発掘調査の進展によって評価が変わることもあり得ることを最後にお断りしておきたい。（岡田）

引用・参考文献

索引

- 小山正志・竹原寿雄 2006 『新版 標準土色録』日本色研事業株式会社
藤本田大 2012 『三内丸山遺跡の盛土の形成過程とその場所性の解明』『特別史跡 三内丸山遺跡 年報-15-』青森県教育委員会
小林謙一 2005 『付着炭化物のAMS測定による内陸土器の年代研究』『特別史跡 三内丸山遺跡 年報-8-』青森県教育委員会
小林謙一 2006 『三内丸山遺跡出土試料の14C年代測定(2006年度)』『特別史跡 三内丸山遺跡 年報-11-』青森県教育委員会
北藤一郎 2002 『三内丸山遺跡の集落と配石』『歴史研究 特別号2号 三内丸山遺跡の生態系史』青森県教育委員会
北藤一郎・中村俊夫 2001 『縄文時代の高精度編年：三内丸山遺跡の年代測定』『第四紀研究』第40巻 第6号
山崎清男 1979 『日本先史土器の編年』『先史考古学会』

第1節 遺構 第1項 建物跡 1 壁穴建物跡
南半部町教育委員会 2002 『大船古遺跡 ハマナス野遺跡Vol. X Ⅱ』

- 第1節 遺構 第1項 建物跡 2 板柱建物跡
青森県考古学会 2007 『津軽・西海岸の考古学』平成19年度青森県考古学会秋季大会資料集
阿部昭典 2010 『新石器における縄文後・晩期の集落構造の複雑化』『正面3 居人遺跡から洞窟見る縄文社会』
阿部昭典 2012 『縄文時代後期初期における集落構造・住居形態の変化と地域間関係』『三十稲城土器文化の世界』
石井寛 1998 『縄文集落と板柱建物跡』『先史日本の住居とその周辺』奈良国立文化財研究所シンポジウム報告
石井寛 2007 『後期集落における二つの住居系列—板柱居住址系列と板柱建物跡系列—』『縄文時代』18
石井寛 2008 『板柱建物跡から観た後期集落構造』『縄文時代』19
小林士子 2009 『平野の縄文時代前期の集落—ヤマト前期集落文化の考古学—』『ようちん人地学』
小林士子 2012 『宮室周辺域における縄文時代の遺跡群—西海遺・西川口・宮ノ前遺跡の検討を通して—』『東北地方における縄文・先史・技術に関する歴史地理的総論』
合研究 研究報告書11 東北芸術工科大学東北文化研究センター
宮城博徳 2003 『板柱建物跡(縄文時代)—秋田県列を中心に—』秋田県立博物館研究報告第28号

- 第1節 遺構 第2項 土坑
青森県 2017 『青森県史 資料編 考古』 旧石器 縄文前期—中期』
秋田県教育委員会 2019 『藤ノ木遺跡発掘調査報告書』
小林士子 2014 『吹流遺跡出土の縄文土器』『東北芸術工科大学東北文化研究センター—紀要—』13
坂口 隆 2003 『縄文時代野尻穴の研究』アム・プロモーション
杉野善孝 2017 『野尻穴』『青森県史 資料編 考古』 旧石器 縄文前期—中期』青森県
函館市教育委員会・特定非営利活動法人函館市縄文文化財事業団編 2009 『函館市白丸小学校遺跡・豊蔵C・D・F・O遺跡』函館市教育委員会・特定非営利活動法人函館市縄文文化財事業団第5巻
山田哲郎 2001 『北海道南部高島半島の遺跡から出土する植物遺体』『北海道考古学情報交換会20周年記念論集 高島半島の考古学』北海道考古学情報交換会20周年記念論集作成実行委員会

- 第1節 遺構 第3項 墓(土坑墓 環状配石墓 環状土器)
青森県教育委員会 1977 『近野遺跡発掘調査報告書(Ⅱ)』三内丸山遺跡Ⅱ』青森県縄文文化財調査報告書第33巻
青森県教育委員会 1994 『三内丸山(2)遺跡Ⅱ』青森県縄文文化財調査報告書第157巻
青森県教育委員会 1998 『三内丸山遺跡Ⅰ』青森県縄文文化財調査報告書第251巻
青森県教育委員会 2003 『三内丸山遺跡Ⅱ』青森県縄文文化財調査報告書第362巻

- 第1節 遺構 第4項 捨て場(縄文時代前期)
大野孝司 1990 『飯平遺跡について』『秋田県歴史センター研究紀要』第5号
斉藤栄史 2017 『第Ⅱ部第3章第1節第5項 捨て場』『青森県史 資料編 考古』1
佐藤速夫 1984 『青森県北津軽郡深堀町遺跡発掘概報』『東アジアの先史文化と日本』
『三内丸山遺跡などの盛土遺構の研究』会 2011 『三内丸山遺跡などの盛土遺構の研究—資料集—』
宇野善徳 2017 『第Ⅱ部第2章第3節 39 畑内遺跡』『青森県史 資料編 考古』1
北藤一郎 2002 『第Ⅴ巻 第1節 人と自然の環境史』『青森県史 別冊 三内丸山遺跡』

- 第1節 遺構 第5項 盛土(縄文時代中期)
安岡悦 2013 『三内丸山遺跡における盛土遺構の形成プロセスの解明』『特別史跡 三内丸山遺跡 年報-16-』
阿部友孝 2003 『縄文後期における遺構更新と「記憶」—後晩期集落と配石の重複関係について—』『神奈川考古』29
阿部友孝 2004 『祖先記憶—再生遺話の語り方—配石遺構・墓制との関連において—』『神奈川考古』40
宇田川洋 1985 『アイヌ文化圏の語り場遺跡』『考古学雑誌』70-4
岡村道雄 1996 『縄文文化の発展—教育書記載を引用して—』『歴史と地理』490
岡村道雄 2010 『縄文時代「盛土遺構」研究のふたご』『三内丸山遺跡などの盛土遺構の研究—予稿集—』三内丸山遺跡など盛土遺構の研究会
藤原隆 2014 『藤原町遺跡』『北海道考古学会2014年度研究大会 盛土遺構を編る 予稿集』
藤本田大 2012a 『遺跡における集落の年代決定』『考古学ジャーナル』632
藤本田大 2012b 『遺跡における集落の年代決定』『考古学ジャーナル』632
河野道雄 1935 『貝塚人骨の語とアイヌのイオマンテ』『人類学雑誌』50-4
小林克哉 2011 『三内丸山遺跡などの盛土遺構の研究—資料集—』三内丸山遺跡など盛土遺構の研究会
小林克哉 2011 『三内丸山遺跡などの盛土遺構の研究』『特別史跡 三内丸山遺跡 年報-14-』
小林克哉 2012 『三内丸山遺跡出土の遺土—その2—』『特別史跡 三内丸山遺跡 年報-15-』
藤原隆 2015 『三内丸山遺跡出土の遺土—付着物中炭素の分析について—』『特別史跡 三内丸山遺跡 年報-18-』
佐々木由香 2013 『縄文時代のマメ類利用の研究—三内丸山遺跡を中心に—』『特別史跡 三内丸山遺跡 年報-16-』
鈴木孝彦 1975 『内陸土器文化における土器の集落—内陸土器の特有な出土状況について—』『考古学ジャーナル』111
鈴木孝彦 2008 『コードとしての配石—集落—行為の再現性と反復性—』『考古学ジャーナル』528
辻本裕也 2012 『三内丸山遺跡西盛土の層相解明』『三内丸山遺跡39』青森県縄文文化財調査報告書第520巻
辻本裕也 2014 『土器分析からみた盛土遺構の研究』『北海道考古学会2014年度研究大会 盛土遺構を編る 予稿集』
熊手守一 2017 『配石』『函館町 函館遺跡』(公財)北海道縄文文化財センター調査報告書第333巻 (公財)北海道縄文文化財センター
宮川純子 2012 『三内丸山遺跡西盛土より出土した大層相化石』『三内丸山遺跡39』青森県縄文文化財調査報告書第520巻

- 第2節 遺物 第1項 前期の土器(円筒下層式土器)
松山力・木村廣次郎 1997 『第5章第1節畑内遺跡における中層石層について』『畑内遺跡』青森県縄文文化財調査報告書第211巻
星野隆之・宇野善徳 2006 『十和田中野テフラからみた円筒下層式土器成立期の土器群相』『植生史研究』特別第2号 三内丸山遺跡の生態系
三宅徳也 1989 『円筒土器下層式土器』『縄文土器大観』1 小学館

- 第2節 遺物 第2項 中期の土器(円筒上層式土器と大木式土器)
石塚理雄 1970 『石神遺跡』ニューサイエンス社
大島高行 1976 『円筒土器上層式土器の認識に関わる2・3の問題』『北海道考古学』12
小笠原 繁行 2001 『土器』『青森県史 別冊三内丸山遺跡』

- 小笠原 肇行 2007 『青森県周辺の縄文時代中期後半の上野楯形-円筒土器 ω 式から榎林式へ-』『村越源先生喜寿記念論集』
 小笠原 肇行 2008 『円筒土器式』『縄文縄土器』アム・プロモーション
 小笠原 肇行 2017 『土器の変遷（前期中葉から中期）』『青森県史 資料編考古1』
 小俣内 邦之 2008 『陸奥大木系土器（榎林式土器、扇花土器、大木10式洋行土器）』『縄文縄土器』アム・プロモーション
 中野 孝夫 2008 『大木 γ -8土器』『縄文縄土器』アム・プロモーション
 三宅健也 1978 『円筒土器の発生とその意味』『青森県立土器研究所年報』3
 三宅健也 1981 『円筒土器』『縄文文化の研究』3 藤山園
 三宅健也 1989 『円筒土器様式』『縄文土器大観』1 小学館
 村越 源 1974 『円筒土器文化』藤山園

第2節 遺物 第3項 石器

- 上野信保 1998 『北海道式石器の製作工程について』『国指定史跡 北沢貝塚発掘調査報告書-水場遺跡の調査-』伊達市教育委員会
 青森県 2010 『青森県史 資料編 考古1 旧石器 縄文前期-1期』
 岩田史之 2010 『開拓運動の足跡 三内丸山遺跡』『開拓遺跡-高尾遺跡』青森県教育委員会
 上野信保 2017 『円筒土器文化圏における食料加工技術の研究-糠石器の使用痕分析および残存デンプン分析を中心に-』『特別史跡 三内丸山遺跡 年報-13-』青森県教育委員会
 上野信保 2014 『「扇平石器」の形態的分布からみた円筒土器文化圏の動態』青森県考古学第22号
 上野信保 2015 『縄文時代における脱穀-杵打技術の研究』六一書房
 北の縄文研究会 2012 『北の縄文』『円筒土器文化の発祥』一三内丸山遺跡からの視点一』
 小島眞理 1999 『北海道式石器の分布とその意義』北海道考古学第32号
 高橋 淳 1998 『石器』『三内丸山遺跡 第二分冊』青森県教育委員会
 高橋 淳 2000 『三内丸山遺跡の北海道式石器について』『史跡 三内丸山遺跡 年報-3-』青森県教育委員会
 高橋 淳 2003 『三内丸山遺跡跡六旗地区の石器組成と鉄入磨面新石器の使用法について』『史跡 三内丸山遺跡 年報-6-』
 高橋 淳 2010 『青森県内出土例を中心とした異形石槍について』青森県考古学第18号
 高橋 淳 2014 『石器の文化から見た縄文時代中期末の北東北、北海道について』研究紀要第19号 青森県縄文文化財調査センター
 高橋 淳 2018 『円筒土器文化の石器群の成立と半円状磨面打製石器-北海道式石器』『研究紀要第23号』青森県縄文文化財調査センター
 野村秀典 2017 『石器について』『本古内町 大野平跡』3 北海道縄文文化財センター
 三内丸山遺跡発掘調査委員会 2008 『三内丸山遺跡』『史跡 三内丸山遺跡 年報-19-』
 高橋 淳 2013 『青森県の石器組成について-石器の組み合わせについて-』『青森県考古学』第22号
 立川照一 2014 『石器石材について』『公刊』北海道縄文文化財センター2014『本古内町 新宮遺跡』
 豊原昭司・澤田隆 1991 『北海道式石器の新資料』北方探究第1号 北方懇話会
 宮内内一郎 1998 『半円状磨面打製石器の機能面について』『探基』1遺跡 193-197青森県教育委員会
 長谷部百八 1927 『円筒土器文化』『人類学雑誌』42-1 東京大学協会
 沼本淳子 2005 『ジュンゲル考古学から見た縄文土器と文化的景観』『特別史跡 三内丸山遺跡 年報-8-』
 堀川秀一 2017 『船越跡の骨角器と動物遺物』『船越山 船越遺跡』『公刊』北海道縄文文化財センター
 松江 貞 1984 『北海道における標記石について-石器製作からのアプローチ-』『河野道雄博士没後20周年記念論文集』河野道雄博士没後20周年記念論文集発行委員会
 南茅渚町縄文文化財調査会1995 『大木A遺跡II、ハマナス野遺跡』南茅渚町縄文文化財調査報告書第5号
 三宅健也 1984 『石器製作について』『和野山遺跡』青森県教育委員会
 山田清郎 2003 『北海道南端高尾平島の遺跡から出土する植物遺物』『北海道考古学情報交換会30周年記念論文集 高尾平島の考古学』〔編集・発行 北海道考古学情報交換会20周年記念論文集作成委員会〕

第2節 遺物 第4項 土器と瓦器

- 堀野裕介 1997 『円筒土器に伴う岩鏡(2)』『土器研究の地平』1
 堀野裕介 1998 『北上川流域における板状O形土器とそれ以外の形態について』『北方の考古学 野村俊先生喜寿記念論集』
 堀野裕介 1999 『円筒土器に伴う岩鏡(3)』『北上川流域縄文文化財センター紀要』
 長沼孝 1999 『北海道の土器』『土器研究の地平』3
 小笠原肇行 1999 『円筒土器文化圏における前期の土器について 一三内丸山遺跡の事例を中心に-』『土器研究の地平』3
 堀野裕介 2005 『円筒土器に伴う瓦鏡 一三内丸山遺跡の資料を中心に-』『特別史跡 三内丸山遺跡年報-8-』
 坂本洋一 1992 『宮城県の土器』『国立歴史民俗学館研究報告』37
 堀野裕介 1993 『円筒土器に伴う岩鏡(1)』『考古学ジャーナル』262
 鈴木孝彦 1985 『土器の研究(II)一円筒土器に伴う土器-』『高尾見聞』
 沼本淳子 2005 『ジュンゲル考古学から見た縄文土器と文化的景観』『特別史跡 三内丸山遺跡年報-8-』
 村越 源 1974 『円筒土器文化』藤山園

第2節 遺物 第5項 土製品と石製品

- 河野道雄2012 『縄文時代の心の考古学-景観論と「第二の道具」論-』『祭祀儀礼と景観の考古学』筑波大学研究開発推進機構伝統文化リサーチセンター
 岡田新太郎1997 『三内丸山遺跡と語る縄文世界 アサヒグラフ別冊』
 岩田史之 2012 『三内丸山遺跡のミニチュア土器に関する予察』『特別史跡 三内丸山遺跡年報-15-』
 岩田史之 2017 『ミニチュア化された模倣品-三内丸山遺跡の棒状土製品を中心として-』『特別史跡 三内丸山遺跡年報-20-』
 江川輝彦1965 『青竜丸形石器考』『史学』第3巻第1号
 小島眞理 2005 『縄文時代における軽石模倣品について-北海道西部を中心として-』『高尾源先生喜寿記念論文集 北島の考古学』
 鈴木孝彦 2007 『石鏡』『縄文時代の考古学』心と信託 同成社
 宇野幸雄 2013 『青森県産の刀打鏡-石鏡について』『特別史跡 三内丸山遺跡 年報-16-』
 宮内史郎 1983 『青森県産石鏡の文化的研究9 縄文人の精神文化』藤山園
 西脇祐次夫 2007 『石鏡とその類品』『縄文時代の考古学』心と信託 同成社
 西脇祐次夫 2011 『岩内町東山1遺跡出土の棒状有孔石鏡』『特別史跡 三内丸山遺跡 年報-14-』
 野村崇 1983 『石鏡・石刀』『縄文文化の研究9 縄文人の精神文化』藤山園
 堀田友之 2000 『津軽海峡とサメの関-本州北道地域出土のサメの歯をめぐって-』『村越源先生喜寿記念論文集』弘前大学教育学部考古学研究会OBoE
 堀田友之 2004 『津軽海峡地域の先史・先史文化』『仙台・日本海王文化の起源と展開』敬和学園大学人文社会科学研究所
 堀田友之 2004 『青森県出土の鏡について』『岩内(18)遺跡』野辺地町文化財調査報告書第4巻 野辺地町教育委員会
 堀田友之 2014 『五津津海峡とサメの関-先史文化』『津軽海峡の先史文化研究』六一書房
 堀田友之 2014 『6号青森県出土の地鏡』『津軽海峡の先史文化研究』六一書房
 山本輝久 1983 『石鏡』『縄文文化の研究9 縄文人の精神文化』藤山園

第2節 遺物 第6項 骨角器

- 吉澤多彦等 1968 『骨角製釣針の一般的形式と「鹿角製長輪軸状釣針」の対比』『うとう』70
 葛城裕雄 2002 『骨角器』『青森県史 別冊 三内丸山遺跡』青森県
 金子浩一・藤原 隆 2002 『扇花土器の文化』『扇花土器』『開拓遺跡-高尾遺跡』青森県教育委員会
 青森県史 2013 『6号扇花地区から出土した骨角器の製作残滓と出土骨角器の部位別組成 一骨角器素材における部位の選択性に関する検討-』『特別史跡 三内丸山遺跡 年報-16-』
 青森県史 2016 『津軽海峡地域の骨角器 一円筒土器文化圏の骨角器製作技術継承を中心に-』『一般社団法人 日本考古学協会2016年度弘前大会 第1分科会 津軽海峡の縄文文化 研究報告資料集』
 澤本淳子・青木孝紀子・佐藤泰樹 2017 『扇花貝塚の鳥獣類遺体と骨角器類 一同社社大所蔵「酒造コレクション」の内容-』『同社社大歴史資料館報』20
 伊達市噴火湾文化研究所 2013 『K I T A K O G A N E』

西本徳生・新井倫子・大谷茂之 2014 「北海道の青貝貝製品」[日本考古学協会2014年度 伊達大会 研究発表資料集]
丹羽百合子 1983 「解体・分配・調理」[縄文文化の研究2 生業] 鎌山園
藤沼謙 1973 「縄文時代の漁業」 鎌山園

第2節 遺物 第7項 漆製品

- 岡村道雄 2010 「6の図る歴史30 縄文の漆」 同成社
岡村道雄 2010 「縄文時代の人と植物の関係史」 国立歴史民俗博物館研究報告第187集
千葉市立郷土博物館 2012 「平成24年度特別展 漆—その歴史と文化—」
鹿嶋修一・鈴木三男 2004 「日本には縄文時代前期以降のウシが生育した」[植生学研究] 第12巻第1号
佐竹義典・原寛・江原俊次・富成志夫編 1989 「日本の野生植物 本邦産」 平凡社
吉川純一・伊藤由美子 2006 「縄文時代東北方北部のウシ利用の調査」[特別史跡 三内丸山遺跡 年報-9-] 1
吉川純一 2006 「ウシ花粉の同定と青森県における縄文時代前期の状況」[植生学研究] 第14巻第1号
岡村道雄 2006 「6の図る歴史31-1 漆1」 法政大学出版局
吉川純一・伊藤由美子 2006 「縄文時代東北方北部のウシ利用の調査」[特別史跡 三内丸山遺跡 年報-9-] 1
吉川純一 2006 「ウシ花粉の同定と青森県における縄文時代前期の状況」[植生学研究] 第14巻第1号
津波啓吾(表)
赤沼英男 2004 「閉鎖型土器文化圏における石器ならびに土器表面加工技術に関する研究—三内丸山および知道遺跡を中心として—」[特別史跡 三内丸山遺跡 年報-7-] 1
岡村道雄 2010 「三内丸山など北日本縄文遺跡の漆文化」[特別史跡 三内丸山遺跡 年報-13-]

第3節 交流・交易

- 合地信生 2004 「三内丸山遺跡出土製鉄石炭の産地について」[特別史跡 三内丸山遺跡 年報-7-] 1
嶋正徳・舘見哲也 2015 「青森県縄文文化財調査センターにおける石材料産地調査の意義」[研究紀要] 第20号 青森県縄文文化財調査センター
杉野香淳子 2014 「青森県縄文文化財調査センターにおける石材料産地調査」[研究紀要] 第19号 青森県縄文文化財調査センター
杉野重夫・金成太郎・杉野香淳子 2008 「青森県出土製鉄石炭の産地調査」[研究紀要] 第13号 青森県縄文文化財調査センター
杉野重夫・金成太郎 2009 「三内丸山遺跡で出土した青+輝岩製鉄石炭物産」[特別史跡 三内丸山遺跡 年報-12-] 1
中村由亮 2012 「青森県出土製鉄石炭の産地調査」[特別史跡 三内丸山遺跡 年報-10-] 1
西沢英典 1999 「S7629号の第7期—第7期から出土した動物遺物について— 池内遺跡 遺物・資料編」 秋田県教育委員会
福原淳一 2017 「館崎遺跡出土の長野・都+輝岩製鉄石炭」[福島県 館崎遺跡] (公報) 北海道縄文文化財センター
福原友之 2014 「静軽海城域の先史文化研究」 六一書房
小笠原正明・阿部千寿 2007 「天然アスファルトの利用と供動」[縄文時代の考古学6 ものづくりに 同成社]
岡村道雄 1997 「後着型アスファルトの利用と交易」[このまどわった日本の先史時代] 角川書店
岡村道雄 2012 「縄文文化の領域設定に関する諸問題」[縄文文化「閉鎖型土器文化の世界」—三内丸山遺跡からの視点—北の縄文研究会]
岡村道雄 2014 「縄文文化の領域設定に関する諸問題」[縄文文化「閉鎖型土器文化の世界」—三内丸山遺跡からの視点—北の縄文研究会]
杉野香淳子 2017 「青森県におけるアスファルトの利用」[縄文文化「閉鎖型土器文化の世界」—三内丸山遺跡からの視点—北の縄文研究会]
福原友之 2000 「本州北道地域における先史アスファルト利用」[研究紀要] 5 青森県縄文文化財調査センター
福原友之 2014 「付帯11 本州北道地域における先史アスファルト利用」[静軽海城域の先史文化研究] 六一書房
福原友之 2004 「青森県出土の琥珀について」[伊田(18)遺跡] 野辺地町教育委員会

第4節 生業 第1項 採集

- 青森県 2017 「青森県史 資料編 考古」 田沼啓 縄文早期前—中期
小畑正三 2016 「青森県史 資料編 考古」 最新科学がすすむ歴史の探照灯 167頁 吉川弘史館
小畑正三・貞原彰 2014 「三内丸山遺跡集積土出土土器の比重調査の成果とその意義」[特別史跡 三内丸山遺跡 年報-17-] 1
大島正行 1996 北海道人の衣文化における織物類の時代的推移」[人類学雑誌] 104-5 日本人類学会
上條信彦 2000 「閉鎖型土器文化圏における食料加工技術の研究—石器磨削の使用成分分析および残存タンパク質分析を中心に—」[特別史跡 三内丸山遺跡 年報-13-] 1
工藤雄一郎 2004 「縄文時代の木材料利用に関する実験考古学的研究—東北大学川内遺跡発掘実証実験—」[植生学研究] 第12巻 第1号
古代の研究者会・鹿嶋修一・鈴木三男 2015 「第100号 北の谷 6. 自然科学分庁(4) 北の谷地区から出土した木材の樹種」[三内丸山遺跡42] 青森県教育委員会
小畑和典 2014 「古文化圏の交流から見た縄文時代の東北の北道—北海道について—」[研究紀要第19号 青森県縄文文化財調査センター]
西澤秀吉 2017 「石器について」[古本町町 大平遺跡(3)] 北海道縄文文化財センター
佐々木由香・鹿嶋修一 2004 「第12巻-2 岩湯小谷(4) 三内丸山遺跡の製鉄と木炭からみる森林資源利用」[縄文文化財調査報告書第371集]
佐藤洋一郎 1998 「三内丸山遺跡第6鉄器地区出土のクワのDNA分析」[三内丸山遺跡42] 青森県縄文文化財調査報告書第249集
渋谷綾子 2010 「石器或存タンクンからみた三内丸山遺跡の植物利用の意義」[特別史跡 三内丸山遺跡 年報-13-] 1
杉野香淳子 2017 「第1部第3章第1節遺物第3項 野糞」[青森県史 資料編 考古] 田沼啓 縄文早期前—中期 青森県
新井倫子 2009 「タリ」[縄文時代の考古学3 大森と森の中] 同成社
鹿嶋修一・鈴木三男 1998 「三内丸山遺跡第6鉄器地区出土木材の種類」[三内丸山遺跡42] 青森県縄文文化財調査報告書第249集
鹿嶋修一 2015 「北の谷出土人骨の分析について」[三内丸山遺跡42] 青森県縄文文化財調査報告書第57集
山田信昭 1993 北海道の遺跡から出土した植物遺物について」[古代文化] 第45巻4号
山田信昭・柴原信子 1997 「北海道の縄文時代遺跡から出土した集果類—タリについて—」[北海道拓殖史類記] 第25号 北海道拓殖史会
吉川純一 2010 「三内丸山遺跡から出土した大型植物化石」[特別史跡 三内丸山遺跡 年報-13-] 1
吉川由伸 2011 「タリ花粉の散布と三内丸山遺跡周辺における縄文時代のタリ利用の分布状況」[植生学研究] 18-2
吉川純一・鈴木三男・鹿嶋修一・新井倫子 2006 「三内丸山遺跡の植物資源」[植生学研究] 第14巻第1号 三内丸山遺跡の生業系史
鹿嶋修一・吉川純子 古代の森林研究」 2008 「第3巻(3) 北海道の植生史と国内の植生環境」[三内丸山(9)遺跡Ⅱ] 青森県縄文文化財調査報告書第48集
青嶋昌一 1992 「古代雑穀の検出」[月刊考古学ジャーナル] 265号 ニューエッセンス社
南川博男 2015 「北の谷出土人骨の同位体分析と食性分析について」[三内丸山遺跡42] 青森県縄文文化財調査報告書567集

第4節 生業 第2項 漁撈

- 小沢成徳 1989 「縄文貝塚集積地の貝類組成並びにその先史漁撈学的意味—縄文貝塚民の漁撈活動の復原に関する一試論—」[人類学雑誌] 77-4
北沢智雄 1995 「縄文時代のタリ」 小学館
阿部明哉 2007 「動物遺存体」[白志野史苑2 遺跡(3)] (財)北海道縄文文化財センター調査報告第24集
江塚輝雄 1995 「青森県貝塚集積地調査報告」[石器時代] 2
江塚輝雄 1996 「十日市貝塚群出土の鳥獣骨から見た縄文文化の食料資源」[奥州史苑] 1
江塚輝雄 1993 「青森県下北郡貝塚民」[日本考古学年報] 6
江塚輝雄 1995 「青森県八戸市磯ノ林貝塚」[日本考古学年報] 13
太郎吉 川門 2002 「縄文時代のメダカ漁—メダカ漁から探る縄文人の技術と知識—」[縄土考古学とロマン] 市川金丸先生古稀を祝う会
金子浩吉 1975 「縄文時代の青森県出土の動物化石」[縄文時代の考古学] 青森県縄文文化財調査報告書第25集
金子浩吉 1976 「熊鷹、熊鷹貝塚出土の動物化石について」[熊鷹貝塚集積地—自然動物園編—] 苫小牧市史編纂人室
金子浩吉 1979 「青森県貝塚出土の動物遺存体と骨質分析」[奥州史苑] 8 町教育委員会
金子浩吉 2002 「苫小牧市明神22遺跡出土の動物遺体」[苫小牧東部工業地帯の遺跡群—「東道ノ上(3)遺跡」 青森県縄文文化財調査報告書 第424集
縄文文化財調査センター
熊野哲 2008 「12 力持遺跡出土動物遺存体について」[力持遺跡発掘調査報告書] 岩手県文化財調査事業推進課縄文文化財調査報告書第510集
原住新二・原住一男 2006 「東道ノ上(3)遺跡から得られた小粒産貝製品について」[東道ノ上(3)遺跡] 青森県縄文文化財調査報告書 第424集

神原(2)遺跡	青森県教育委員会	2013	『神原(2)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第530集
照ノ平遺跡	青森県教育委員会	1995	『照ノ平遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第180集
照無(4)遺跡	青森県教育委員会	1997	『照無(4)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第209集
照無(6)遺跡	青森県教育委員会	1998	『照無(1)遺跡 照無(2)遺跡 照無(6)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第257集
照沢遺跡	青森県教育委員会	1978	『照沢遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第86集
宇留(7)遺跡	青森県教育委員会	2002	『宇留(7)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第65集
宇留(7)遺跡	青森県教育委員会	2002	『宇留(7)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第65集
宇留(7)遺跡	青森県教育委員会	1990	『宇留(7)遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第125集
柳袋(1)遺跡	五戸町教育委員会	2006	『柳袋(1)遺跡・柳袋(2)遺跡・宇津遺跡』
金子浜貝塚	金子清品・橋本光・奈良正義	1983	『龍花貝塚第3次調査報告』『むつ市文化財調査報告書第9集』
栄山(3)遺跡	青森県教育委員会	2001	『栄山(3)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第294集
塚家(1)遺跡	青森県教育委員会	1998	『塚家(1)遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第36集
塚ノ沢(3)遺跡	青森県教育委員会	2001	『塚ノ沢(2)・(3)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第305集
	青森県教育委員会	2003	『塚ノ沢(3)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第346集
	青森県教育委員会	2004	『塚ノ沢(3)遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第372集
駒渡場付近	渡辺誠	1973	『縄文時代の湧き』雄山閣
沢ノ黒遺跡	青森県教育委員会	2007	『沢ノ黒遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第435集
沢黒込遺跡	青森県教育委員会	1992	『沢ノ黒遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第144集
三内遺跡	青森県教育委員会	1978	『三内遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第37集
	青森県教育委員会	2007	『三内遺跡Ⅱ』三内丸山(9)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第434集
三内丸山遺跡	青森県教育委員会	1996	『三内丸山遺跡Ⅴ』青森県埋蔵文化財調査報告書第204集
	青森県教育委員会	1996	『三内丸山(2)遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第288集
	青森県教育委員会	1996	『三内丸山遺跡Ⅵ』青森県埋蔵文化財調査報告書第205集
	青森県教育委員会	1997	『三内丸山遺跡Ⅶ』青森県埋蔵文化財調査報告書第230集
	青森県教育委員会	1998	『三内丸山遺跡Ⅷ』青森県埋蔵文化財調査報告書第249集
	青森県教育委員会	2000	『三内丸山遺跡ⅧⅡ』青森県埋蔵文化財調査報告書第289集
	青森県教育委員会	2003	『三内丸山遺跡ⅧⅢ』青森県埋蔵文化財調査報告書第302集
	青森県教育委員会	2015	『三内丸山遺跡ⅧⅣ』青森県埋蔵文化財調査報告書第557集
	青森県教育委員会	2017	『三内丸山遺跡ⅧⅣII』青森県埋蔵文化財調査報告書第588集
三内沢部(1)遺跡	青森県教育委員会	1978	『三内沢部遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第41集
三内沢部(3)遺跡	青森県教育委員会	2005	『三内沢部(3)遺跡 栄山(1)遺跡 洗ノ(2)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第290集
	青森県教育委員会	2008	『江古遺跡 三内沢部(3)遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第458集
三内丸山(9)遺跡	青森県教育委員会	2007	『三内遺跡Ⅱ、三内丸山(9)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第434集
	青森県教育委員会	2008	『三内丸山(9)遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第454集
三内丸山(5)遺跡	青森県教育委員会	2004	『三内丸山(5)遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第279集
	青森県教育委員会	2000	『三内丸山(5)遺跡Ⅲ』青森県埋蔵文化財調査報告書第370集
	青森県教育委員会	2000	『三内丸山(6)遺跡Ⅰ』青森県埋蔵文化財調査報告書第297集
	青森県教育委員会	2001	『三内丸山(6)遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第307集
	青森県教育委員会	2002	『三内丸山(6)遺跡Ⅲ』青森県埋蔵文化財調査報告書第327集
	青森県教育委員会	2017	『三内丸山(6)遺跡Ⅳ』青森県埋蔵文化財調査報告書第585集
三内遺跡調査	青森県教育委員会	1962	『三内丸山遺跡発掘調査報告書』青森市の文化財1
東遺跡	青森県教育委員会	2002	『東遺跡Ⅰ』青森県埋蔵文化財調査報告書第865集
西ノ楯(1)遺跡	青森県教育委員会	1983	『西ノ楯遺跡発掘調査報告書』青森市の文化財10
西ノ楯遺跡	縄ノ間村教育委員会	1997	『西ノ楯遺跡』縄ノ間村文化財調査報告書第1集
	縄ノ間村教育委員会	1998	『西ノ楯遺跡Ⅱ』縄ノ間村文化財調査報告書第2集
白浜海岸	渡辺誠	1973	『縄文時代の湧き』雄山閣
新城市(4)遺跡	青森県教育委員会	2012	『江古遺跡群発掘調査報告書Ⅴ』青森県埋蔵文化財調査報告書第112集
新田遺跡	青森県教育委員会	2006	『新田遺跡Ⅰ』青森県埋蔵文化財調査報告書第410集
新野遺跡	青森県教育委員会	1998	『新野遺跡Ⅰ』青森県埋蔵文化財調査報告書第289集
	青森県教育委員会	2000	『新野遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第275集
	青森県教育委員会	2006	『新野遺跡発掘調査報告書Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第87集
	青森県教育委員会	2008	『新野遺跡発掘調査報告書Ⅲ』青森県埋蔵文化財調査報告書第98集
砂子瀬遺跡	青森県教育委員会	2009	『砂子瀬遺跡 水(上)3)遺跡 水(上)4)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第466集
砂沢平遺跡	青森県教育委員会	1980	『砂沢平遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第53集
太郎遺跡	青森県教育委員会	2005	『太郎遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第36集
田代野群貝塚	青森県教育委員会	2007	『太郎遺跡発掘調査報告書Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第42集
田代遺跡	青森県教育委員会	1995	『田代野田小畑野貝塚』青森県埋蔵文化財調査報告書第55集 考4-10
	青森県教育委員会	2006	『田代遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第413集
	青森県教育委員会	2011	『田代遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第506集
野内久保	東北町教育委員会	2008	『野内久保(1)遺跡』東北町埋蔵文化財調査報告書第17集
(古木)城野遺跡	青森県教育委員会	1989	『古野遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第119集
玉清水遺跡	青森県教育委員会	1967	『玉清水遺跡発掘調査報告書』青森市の文化財6
辻野遺跡	青森県教育委員会	1997	『辻野遺跡Ⅰ』青森県埋蔵文化財調査報告書第206集
	青森県教育委員会	2005	『辻野遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第304集
	青森県教育委員会	2006	『辻野遺跡Ⅲ』青森県埋蔵文化財調査報告書第414集
	青森県教育委員会	2007	『辻野遺跡Ⅳ』青森県埋蔵文化財調査報告書第432集
槻ノ木(1)遺跡	青森県教育委員会	1983	『槻原遺跡・陣馬川遺跡・槻ノ木遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第77集
	青森県教育委員会	1995	『槻ノ木(1)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第169集
	青森県教育委員会	1997	『津山遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第221集
津山遺跡	弘前県教育委員会	2001	『津山(1)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第7集
狭間七田山遺跡	青森県教育委員会	2003	『狭間(1)遺跡Ⅰ』青森県埋蔵文化財調査報告書第7集
富ノ沢(2)遺跡	青森県教育委員会	1991	『富ノ沢(2)遺跡Ⅰ』青森県埋蔵文化財調査報告書第135集
	青森県教育委員会	1992	『富ノ沢(2)遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第143集
	青森県教育委員会	1993	『富ノ沢(2)遺跡Ⅲ・富ノ沢(3)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第147集
宮平遺跡	村松隆	1966	『青森県西津軽郡宮平遺跡』『日本考古学年報』14
中野(2)遺跡	青森県教育委員会	2001	『中野(2)遺跡』三戸町埋蔵文化財調査報告書第2集
中ノ平遺跡	青森県教育委員会	1975	『中ノ平遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第25集
鳴辺遺跡	青森県教育委員会	2002	『鳴辺遺跡 稲刈(9)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第162集
西保平遺跡	青森県教育委員会	2007	『西保平遺跡(遺物編)』青森県埋蔵文化財調査報告書第416集
	青森県教育委員会	2007	『西保平遺跡Ⅱ(遺物編)』青森県埋蔵文化財調査報告書第436集
新田(1)遺跡	青森県教育委員会	2009	『新田(1)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第472集
新田(2)遺跡	青森県教育委員会	2009	『新田(2)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第471集
二枚楯(1)遺跡	青森県教育委員会	2017	『二枚楯(1)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第561集
藪又(2)遺跡	三沢市教育委員会	2011	『藪又(2)遺跡 遺物編Ⅰ(住居跡)』三沢市埋蔵文化財調査報告書第25集

野木(1)遺跡	青森県教育委員会	1998	『新訂野遺跡・野木遺跡』青森県歴史文化財調査報告書29集
	青森県教育委員会	2000	『野木遺跡Ⅱ』青森県歴史文化財調査報告書261集
	青森県教育委員会	2001	『野木遺跡発掘調査報告書Ⅱ 資料、写真104図版』青森県歴史文化財調査報告書54集
野木和遺跡	青森市教育委員会	1970	『野木和遺跡発掘調査報告書』青森市の文化財5
野場遺跡(1)	陸上町教育委員会	2001	『野場遺跡(1)発掘調査報告書』
野場(5)遺跡	青森県教育委員会	1993	『野場(5)遺跡』青森県歴史文化財調査報告書130集
石川遺跡	陸上町教育委員会	1989	『石川遺跡・野場遺跡(3)発掘調査報告書』
畑内遺跡	青森県教育委員会	1994	『畑内遺跡1』青森県歴史文化財調査報告書161集
	青森県教育委員会	1995	『畑内遺跡Ⅱ』青森県歴史文化財調査報告書178集
	青森県教育委員会	1996	『畑内遺跡Ⅲ』青森県歴史文化財調査報告書187集
	青森県教育委員会	1999	『畑内遺跡Ⅳ』青森県歴史文化財調査報告書202集
	青森県教育委員会	2000	『畑内遺跡Ⅴ』青森県歴史文化財調査報告書229集
	青森県教育委員会	2001	『畑内遺跡Ⅵ』青森県歴史文化財調査報告書308集
	青森県教育委員会	2002	『畑内遺跡Ⅶ』青森県歴史文化財調査報告書328集
	青森県教育委員会	2003	『畑内遺跡Ⅷ』青森県歴史文化財調査報告書345集
八幡宮遺跡	岩本義雄	1973	『青竜刀形骨器』『貝類』10
泉茶沢(2)遺跡	青森県教育委員会	1981	『泉茶沢遺跡』青森県歴史文化財調査報告書67集
花巻遺跡	黒石市教育委員会	1986	『花巻遺跡』黒石市歴史文化財調査報告-4
原子湖池(5)遺跡	五所川原市教育委員会	1997	『原子湖池(4)遺跡・原子湖池(5)遺跡』五所川原市歴史文化財調査報告書20集
東道ノ上(3)遺跡	青森県教育委員会	2006	『東道ノ上(3)遺跡』青森県歴史文化財調査報告書424集
二ツ森集落	大阿用町教育委員会	1997	『二ツ森集落』大阿用町文化財調査報告書5集
	七戸町教育委員会	2007	『二ツ森集落一編 跡地調査報告書』七戸町歴史文化財調査報告書71集
二股(2)遺跡	青森県教育委員会	2007	『二股(2)遺跡』青森県歴史文化財調査報告書437集
古瀬川集落	上北町教育委員会	1983	『古瀬川集落(1)～一遺物編(1)～』上北町文化財調査報告書第1集
宮沢遺跡	青森市宮沢遺跡発掘調査団	1979	『宮沢遺跡』
集合(2)遺跡	平賀町教育委員会	1981	『平賀町集合1号遺跡発掘調査報告書』平賀町歴史文化財報告書 第9集
孫内遺跡	青森県教育委員会	1973	『孫内遺跡発掘調査報告書』青森市の文化財8
八ヶ崎遺跡	八戸市教育委員会	2000	『八ヶ崎遺跡』八戸市歴史文化財調査報告書400集
(西長根遺跡)	八戸市教育委員会	1995	『八戸市内遺跡発掘調査報告書7 西長根遺跡』八戸市歴史文化財調査報告書41集
	八戸市教育委員会	1996	『八戸市内遺跡発掘調査報告書8 松ノ輪遺跡』八戸市歴史文化財調査報告書45集
	八戸市教育委員会	2000	『八戸市内遺跡発掘調査報告書12 西長根遺跡』八戸市歴史文化財調査報告書483集
	八戸市教育委員会	2001	『八戸市内遺跡発掘調査報告書13 松ノ輪遺跡』八戸市歴史文化財調査報告書497集
	八戸市教育委員会	2002	『八戸市内遺跡発掘調査報告書14 松ノ輪遺跡』八戸市歴史文化財調査報告書490集
水上(2)遺跡	青森県教育委員会	2017	『水上(2)遺跡Ⅱ』青森県歴史文化財調査報告書575集
水上(3)遺跡	青森県教育委員会	2017	『水上(3)遺跡Ⅱ』青森県歴史文化財調査報告書466集
	青森県教育委員会	2012	『水上(2)遺跡Ⅰ』青森県歴史文化財調査報告書538集
宮田間遺跡	青森県教育委員会	2007	『宮田間遺跡Ⅱ』青森県歴史文化財調査報告書429集
	青森県教育委員会	2009	『(丸山)2遺跡Ⅱ 宮田間遺跡Ⅱ』青森県歴史文化財調査報告書473集
向田(18)遺跡	野辺地町教育委員会	2004	『向田(18)遺跡』野辺地町文化財調査報告書14集
鎌ノ沢遺跡	青森県教育委員会	2000	『鎌ノ沢遺跡』青森県歴史文化財調査報告書228集
矢野遺跡	七戸町教育委員会	2002	『矢野遺跡』七戸町歴史文化財調査報告書203集
矢部田遺跡	青森県教育委員会	1998	『矢部田(1)遺跡』矢部田遺跡Ⅱ』青森県歴史文化財調査報告書268集
山田(1)遺跡	青森県教育委員会	1982	『山田(1)遺跡』青森県歴史文化財調査報告書255集
山田(2)遺跡	青森県教育委員会	2009	『山田(2)遺跡(1)』(2)』(3)発掘調査報告書』青森県歴史文化財調査報告書468集
	青森県教育委員会	2010	『山田(2)遺跡Ⅱ』青森県歴史文化財調査報告書495集
	青森県教育委員会	2011	『山田(2)遺跡Ⅲ』青森県歴史文化財調査報告書508集
山田(4)遺跡	青森県教育委員会	2010	『山田(4)遺跡』青森県歴史文化財調査報告書484集
山内(1)遺跡	青森市教育委員会	1991	『山内(1)遺跡発掘調査報告書』青森市歴史文化財調査報告書16集
山内(2)遺跡	青森県教育委員会	2005	『山内(1)遺跡』青森県歴史文化財調査報告書205集
榎内(1)遺跡	青森市教育委員会	1995	『榎内遺跡・榎内(2)遺跡発掘調査報告書』青森市歴史文化財調査報告書301集
榎内(2)遺跡	青森市教育委員会	1995	『榎内遺跡・榎内(2)遺跡発掘調査報告書』青森市歴史文化財調査報告書24集
浦船遺跡	青森県教育委員会	2012	『浦船遺跡』青森県歴史文化財調査報告書521集
秋田県			
池内遺跡	秋田県教育委員会	1997	『池内遺跡 遺構編』秋田県文化財調査報告書296集
	秋田県教育委員会	1999	『池内遺跡 遺物・資料編』秋田県文化財調査報告書282集
上ノ山Ⅱ遺跡	秋田県教育委員会	1988	『東北植杉自動車道秋田県発掘調査報告書Ⅱ-上ノ山Ⅱ遺跡・野野遺跡-上ノ山Ⅱ遺跡1』秋田県文化財調査報告書第166集
下ノ遺跡	秋田県教育委員会	2011	『下ノ遺跡』秋田県文化財調査報告書464集
築次Ⅱ遺跡	秋田県教育委員会	2010	『築次Ⅱ遺跡』秋田県文化財調査報告書第400集
太田遺跡	秋田県教育委員会	1991	『東北植杉自動車道秋田県発掘調査報告書Ⅱ-太田遺跡1』秋田県文化財調査報告書第207集
大谷伊豆遺跡	秋田県教育委員会	1984	『東北植杉自動車道秋田県発掘調査報告書Ⅱ』秋田県文化財調査報告書第203集
大畑内遺跡	日本書院株式会社	1979	『大畑内遺跡発掘調査報告書』
大野遺跡	青森県教育委員会	2005	『大野遺跡発掘調査報告書』大野町文化財調査報告書第1集
宮坂貝塚	八木町教育委員会	1979	『宮坂貝塚』
鳥野遺跡	二ツ井町教育委員会	1998	『鳥野遺跡Ⅱ 7次発掘調査概報』二ツ井町歴史文化財調査報告書第7集
駒内内遺跡	秋田県教育委員会	2002	『駒内内遺跡 日置史A遺跡』秋田県文化財調査報告書335集
駒内C遺跡	秋田県教育委員会	2000	『駒内C遺跡』秋田県文化財調査報告書299集
黒谷Ⅱ遺跡	秋田県教育委員会	1985	『黒谷Ⅱ遺跡-第1次発掘調査報告-』
小谷伊豆遺跡	秋田県教育委員会	1999	『小谷伊豆遺跡』秋田県文化財調査報告書285集
境ノ上Ⅱ遺跡	秋田県教育委員会	2004	『境ノ上Ⅱ遺跡』秋田県歴史文化財調査報告書第1集
境ノ上Ⅲ遺跡	秋田県教育委員会	1985	『秋田県歴史文化財調査報告書第1集』
杉沢台遺跡	秋田県教育委員会	1981	『杉沢台遺跡 竹生 遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第87集
高野遺跡	秋田県教育委員会	2004	『高野遺跡』秋田県文化財調査報告書372集
館下Ⅰ遺跡	秋田県教育委員会	1979	『館下Ⅰ遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書62集
繁沢遺跡	秋田県教育委員会	2005	『繁沢遺跡』秋田県文化財調査報告書399集
尻ノ倉遺跡	鹿角市教育委員会	1984	『尻ノ倉遺跡』鹿角市文化財調査報告書26
尻ノ沢遺跡	秋田県教育委員会	2007	『尻ノ沢遺跡』秋田県歴史文化財調査報告書449集
観ノ下Ⅱ遺跡	秋田県歴史文化財センター	2007	『観ノ下Ⅱ遺跡(第2次)』秋田県文化財調査報告書428集
長野台Ⅱ遺跡	高橋 亨	1993	『長野台Ⅱ遺跡』遺構編の複製『秋田考古学』42-43号付録号 秋田考古学協会
長ノ台Ⅱ遺跡	秋田県教育委員会	1993	『観103号遺跡発掘調査]-係川遺跡文化財発掘調査報告書Ⅱ-長ノ台Ⅱ遺跡』秋田県文化財調査報告書236集
はりま道遺跡	秋田県教育委員会	1990	『はりま道遺跡発掘調査報告書(上巻)』秋田県文化財調査報告書192集
深沢遺跡	秋田県教育委員会	2006	『深沢遺跡』秋田県文化財調査報告書407集
二重島A遺跡	北秋田市教育委員会	2006	『森吉Ⅱ遺跡-二重島A遺跡』北秋田市歴史文化財調査報告書第2集

二重島C遺跡	森吉町教育委員会	2003	〔二重島C-G遺跡〕
二重島B遺跡	北秋田町教育委員会	2009	〔二重島B遺跡〕 北秋田町埋蔵文化財調査報告書11集
本宮遺跡	北内町教育委員会	1986	〔本宮遺跡〕
松本台遺跡	秋田県教育委員会	2001	〔松本台遺跡〕 秋田県文化財調査報告書C26集
三ノ田遺跡	秋田県教育委員会	2007	〔三ノ田遺跡〕 秋田県文化財調査報告書417集
山廻上ノ山遺跡	秋田県教育委員会	1988	〔山廻303大瀬川バypass建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書-上ノ山1遺跡・上ノ山B遺跡〕 秋田県文化財調査報告書173集
相田遺跡	秋田県教育委員会	2003	〔相田遺跡〕 秋田県文化財調査報告書350集
若手集			
林通1遺跡	(財)若手集文化財事業部埋蔵文化財センター	2001	〔林通1遺跡発掘調査報告書〕 若手集文化財事業部埋蔵文化財報告書346集
上里遺跡	(財)若手集埋蔵文化財センターほか	1983	〔上里遺跡発掘調査報告書〕 若手集埋蔵文化財調査報告書50集
上平江遺跡	盛岡市教育委員会	1995	〔上平江遺跡群 堀去部・上平江遺跡一平成4・5年度発掘調査報告書〕
宮内遺跡	秋田県山田教育委員会	2009	〔宮内遺跡〕 秋田県山田文化財調査報告書296集
江刺東遺跡	(財)若手集埋蔵文化財センター	1984	〔江刺東遺跡発掘調査報告書〕 若手集埋蔵文化財調査報告書70集
江刺東B遺跡	(財)若手集文化財事業部埋蔵文化財センター	1998	〔江刺東B遺跡発掘調査報告書〕 若手集文化財事業部埋蔵文化財調査報告書27集
大船町遺跡	盛岡市教育委員会	1984	〔大船遺跡群 大船町遺跡・大船町遺跡 昭和58年度発掘調査報告書〕
大島1遺跡	(財)若手集文化財事業部埋蔵文化財センター	1999	〔大島1遺跡発掘調査報告書〕 若手集文化財事業部埋蔵文化財調査報告書290集
大畑宮遺跡	(公財)若手集文化財事業部埋蔵文化財センター	2013	〔大畑宮遺跡発掘調査報告書〕 若手集文化財事業部埋蔵文化財調査報告書406集
大日向遺跡	(財)若手集文化財事業部埋蔵文化財センター	1996	〔大日向2遺跡発掘調査報告書 第2次-第5次調査〕 若手集文化財事業部埋蔵文化財調査報告書225集
	(財)若手集文化財事業部埋蔵文化財センター	1998	〔大日向2遺跡発掘調査報告書 第6次-第8次調査〕 若手集文化財事業部埋蔵文化財調査報告書273集
臥原集1a遺跡	(財)若手集文化財事業部埋蔵文化財センター	1983	〔臥原集1a遺跡発掘調査報告書〕 若手集埋蔵文化財調査報告書61集
五塚1遺跡	(財)若手集埋蔵文化財センター	1986	〔五塚1遺跡発掘調査報告書〕 若手集文化財事業部埋蔵文化財調査報告書97集
堀野野遺跡	一戸町教育委員会	1993	〔堀野野遺跡1〕 一戸町文化財調査報告書382集
	一戸町教育委員会	2006	〔堀野野遺跡2〕 一戸町文化財調査報告書383集
	一戸町教育委員会	2006	〔堀野野遺跡3〕 一戸町文化財調査報告書385集
	一戸町教育委員会	2015	〔堀野野遺跡4-延長部報告書1〕 一戸町文化財調査報告書370集
小川谷地B遺跡	宇石町教育委員会	2013	〔小川谷地B遺跡発掘調査報告書(平成24年度)〕 宇石町埋蔵文化財調査報告書13集
	宇石町教育委員会	2016	〔小川谷地B遺跡発掘調査報告書(平成25-27年度)〕 宇石町埋蔵文化財調査報告書14集
駒山貝塚	宮古市教育委員会	1995	〔駒山貝塚-総掘削調査報告書1〕 宮古市埋蔵文化財調査報告書44
	宮古市教育委員会	2009	〔駒山北端発掘調査報告書 第2期 掘削内容確認調査報告書(骨角器編)〕 宮古市埋蔵文化財調査報告書76
下中尾遺跡	(財)若手集文化財事業部埋蔵文化財センター	2008	〔下中尾1遺跡発掘調査報告書〕 若手集文化財事業部埋蔵文化財調査報告書365集
新田B遺跡	(財)若手集文化財事業部埋蔵文化財センター	2011	〔新田B遺跡発掘調査報告書〕 若手集文化財事業部埋蔵文化財調査報告書52集
大瀬町遺跡	盛岡市教育委員会	1984	〔大瀬遺跡群 大瀬町遺跡・大瀬町遺跡 昭和58年度発掘調査報告書〕
	盛岡市教育委員会	1997	〔大瀬遺跡群 大瀬町遺跡-平成6・7年度発掘調査報告書〕
田代遺跡	(財)若手集埋蔵文化財センター	1982	〔田代遺跡発掘調査報告書〕 若手集埋蔵文化財調査報告書41集
田代IV遺跡	(財)若手集埋蔵文化財センター	1995	〔田代IV遺跡・田代IV遺跡発掘調査報告書〕 若手集文化財事業部埋蔵文化財調査報告書223集
田中遺跡	一戸町教育委員会	2003	〔田中遺跡1〕 一戸町文化財調査報告書46集
川中遺跡	(財)若手集文化財事業部埋蔵文化財センター	2008	〔川中遺跡発掘調査報告書〕 若手集文化財事業部埋蔵文化財調査報告書510集
蟹遺跡	盛岡市教育委員会	1996	〔蟹遺跡-平成7年度発掘調査報告書〕
	盛岡市教育委員会	1998	〔蟹遺跡-平成8年度発掘調査報告書〕
外里遺跡	久慈市教育委員会	2011	〔外里遺跡発掘調査報告書〕 久慈市埋蔵文化財調査報告書第1集
西田遺跡	若手集教育委員会	1980	〔東北新幹線開通埋蔵文化財調査報告書一編(西田遺跡)〕 若手集文化財調査報告書51集
長谷川遺跡	若手集教育委員会	2004	〔長谷川遺跡発掘調査報告書〕 若手集文化財調査報告書434集
平坂平遺跡	(財)若手集文化財事業部埋蔵文化財センター	2004	〔平坂平遺跡発掘調査報告書〕 若手集文化財事業部埋蔵文化財調査報告書437集
平水木B遺跡	(財)若手集文化財事業部埋蔵文化財センター	2010	〔平水木B遺跡発掘調査報告書〕 若手集文化財事業部埋蔵文化財調査報告書449集
新巻遺跡	若手集教育委員会	2017	〔新巻遺跡発掘調査報告書〕 (公財)若手集文化財事業部埋蔵文化財調査報告書8662集
関原1遺跡	(財)若手集文化財事業部埋蔵文化財センター	1991	〔関原1遺跡発掘調査報告書〕 若手集文化財事業部埋蔵文化財調査報告書156集
松原遺跡	(財)若手集文化財事業部埋蔵文化財センター	1995	〔松原遺跡発掘調査報告書〕 若手集文化財事業部埋蔵文化財調査報告書234集
水吉V遺跡	(財)若手集文化財事業部埋蔵文化財センター	1995	〔水吉V遺跡発掘調査報告書〕 若手集文化財事業部埋蔵文化財調査報告書219集
穂間II遺跡	(財)若手集文化財事業部埋蔵文化財センター	1999	〔穂間II遺跡-谷地II遺跡・有矢野遺跡・有矢野館跡発掘調査報告書〕 若手集文化財事業部埋蔵文化財調査報告書303集
真山集			
平岡遺跡	富山県文化財調査埋蔵文化財事務所	2015	〔平岡遺跡発掘調査報告書〕 富山県文化財調査埋蔵文化財発掘調査報告書65集
北海道			
青森B遺跡	青森文書 1988	〔北海道出土のウツヒ-野玉について〕 『北海道考古学』 第21輯	
石狩紅雲山49号遺跡	石狩市教育委員会	2005	〔石狩紅雲山49号遺跡発掘調査報告書〕
石川1遺跡	(財)北海道埋蔵文化財センター	1988	〔石川1遺跡〕 (財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書45集
石川1遺跡	(財)北海道埋蔵文化財センター	2010	〔石川1遺跡〕 (財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書219集
泉沢1遺跡	本庁内町教育委員会	2003	〔泉沢2遺跡A地点〕
上迫3遺跡	北海道埋蔵文化財センター	1985	〔札幌島根池段丘の遺跡群-東上迫・上迫3・上迫4遺跡群-丸島塚特設1精工学用埋蔵文化財発掘調査報告書〕
白根小学校遺跡	函館市教育委員会・特定非営利活動法人函館市埋蔵文化財事業部	2006	〔函館市 白根小学校遺跡〕 函館市教育委員会・函館市埋蔵文化財事業部埋蔵文化財調査報告書第1輯
白根B遺跡	南茅渚町教育委員会	1980	〔白根B遺跡〕
徳川4遺跡	(財)北海道埋蔵文化財センター	2010	〔徳川4遺跡(2)〕 (財)北海道埋蔵文化財センター第289集
大谷沢4遺跡	上ノ国町教育委員会	1987	〔大谷沢4遺跡〕
大平遺跡	(公財)北海道埋蔵文化財センター	2016	〔大平遺跡(2)-遺構編-〕 (公財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書321集
	(公財)北海道埋蔵文化財センター	2017	〔大平遺跡(3)〕 (公財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書328集
大平4遺跡	(財)北海道埋蔵文化財センター	2011	〔本谷内町 大平遺跡・大平4遺跡〕 (財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書280集
大船C遺跡	南茅渚町教育委員会	1988	〔大船C遺跡-平成8年度発掘調査報告書〕
	南茅渚町教育委員会	2002	〔大船C遺跡-ハナツキ野遺跡附属C、D、E、F〕
オハムベツ2遺跡	北海道埋蔵文化財センター	1999	〔オハムベツ2遺跡〕 北海道文化財保護調査報告書第11集
旭ノ島A遺跡	南茅渚町埋蔵文化財調査班	2004	〔旭ノ島A遺跡〕 南茅渚町文化財調査班調査報告書 第11輯
	函館市教育委員会	2007	〔旭ノ島A遺跡〕
茶臼遺跡	本谷内町教育委員会	1999	〔茶臼遺跡B 遺構編〕
川邊遺跡	南茅渚町埋蔵文化財調査班	1990	〔川邊遺跡 川邊D遺跡〕 南茅渚町埋蔵文化財調査報告書 第1輯
桔梗2遺跡	(財)北海道埋蔵文化財センター	1988	〔函館市桔梗2遺跡〕 (財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書46集
	函館市教育委員会・特定非営利活動法人函館市埋蔵文化財事業部	2008	〔桔梗2遺跡〕 函館市教育委員会 函館市埋蔵文化財事業部埋蔵文化財調査報告書

	書第3編
北真金貝塚	伊達市教育委員会 1999 『北真金貝塚発掘調査報告書—水場遺構の調査2—』伊達市教育委員会
倉知川石印遺跡	(財)北海道埋蔵文化財センター 2004 『倉知川石印遺跡』(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書第196集
クノマイ2遺跡	苫小牧市教育委員会 2015 『クノマイ2遺跡 クノマイ2遺跡—日高自動車道門別厚賀遺跡建設工事に伴う埋蔵文化財調査—』日高町埋蔵文化財調査報告書第3編
虎杖浜2遺跡	白老町教育委員会 1978 (財)北海道埋蔵文化財センター 2001 『白老町虎杖浜2遺跡』(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書第158集 (財)北海道埋蔵文化財センター 2002 『白老町虎杖浜2遺跡(2)』(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書第172集 (財)北海道埋蔵文化財センター 2007 『白老町虎杖浜2遺跡(3)』(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書第214集 (財)北海道埋蔵文化財センター 2008 『白老町虎杖浜2遺跡(4)』(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書第256集
コタン温泉遺跡	八雲町教育委員会 1992 『コタン温泉遺跡 縄文時代集落と貝塚の調査 関内湾遺跡調査に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書2』
権現台地遺跡	函館市教育委員会 1980 『権現台地遺跡発掘調査報告』 函館市教育委員会 1981 『権現台地遺跡発掘調査報告書』 函館市教育委員会 1990 『権現台地遺跡』
サイバ沢遺跡	志立函館博物館 1958 『サイバ沢遺跡』 志立函館博物館 1972 『サイバ沢遺跡—函館駅前結構村サイバ沢遺跡発掘報告書—』 函館市教育委員会 1986 『サイバ沢遺跡』 函館市教育委員会、特定非営利活動法人函館市埋蔵文化財事業団 2014 『サイバ沢遺跡』函館市教育委員会、函館市埋蔵文化財事業団発掘調査報告書第13編
栄浜1遺跡	八雲町教育委員会 1983 『栄浜・八雲町栄浜1遺跡発掘調査報告書—』 八雲町教育委員会 1995 『栄浜1遺跡—栄浜小学校校舎増築工事跡地内埋蔵文化財長調査—』 八雲町教育委員会 1998 『栄浜1遺跡報告』
三次郎川石印遺跡	(財)北海道埋蔵文化財センター 2006 『森町三次郎川石印遺跡』(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書第233集
藤川22遺跡	苫小牧市教育委員会、苫小牧市埋蔵文化財調査センター 2002 『苫小牧東区工業地帯の遺跡群Ⅱ—苫小牧市藤川22遺跡発掘調査報告書—』白根遺跡、松前町教育委員会 1983 『白根』
シラカカ2遺跡	(財)北海道埋蔵文化財センター 2000 『八雲町 シラカカ2遺跡』(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書第142集
藤川1遺跡	函館市教育委員会 1986 『函館工業区に伴う緊急発掘調査報告書』
新道4遺跡	(財)北海道埋蔵文化財センター 1987 『龍川2・新道4遺跡』(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書第43集
寿郷3遺跡	寿郷町教育委員会 1979
寿郷町教育委員会	1980 『寿郷町文化財調査報告書2』
船崎遺跡	福島町教育委員会 1985 『船崎遺跡』 (公財)北海道埋蔵文化財センター 2017 『福島町船崎遺跡』(公財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書第333集
船野2遺跡	(公財)北海道埋蔵文化財センター 2012 『北斗市 船野2遺跡A地区・B地区』(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書第283集
船野6遺跡	(公財)北海道埋蔵文化財センター 2013 『北斗市 船野2遺跡C地区』(公財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書第285集
船野4遺跡	(公財)北海道埋蔵文化財センター 2013 『北斗市 船野4遺跡(1)』(公財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書第285集
船野6遺跡	(公財)北海道埋蔵文化財センター 2016 『北斗市 船野6遺跡(2)』(公財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書第327集
戸井貝塚	戸井町教育委員会 1992 『戸井貝塚』 戸井町教育委員会 1994 『戸井貝塚Ⅱ』 奥尻町教育委員会 2002 『砥石遺跡』
砥石遺跡	函館市教育委員会 2003 『函館市 豊原4遺跡』
豊原4遺跡	函館市教育委員会 2003 『函館市 豊原4遺跡』
堀川石印遺跡	(財)北海道埋蔵文化財センター 1994 『七尾町 堀川石印遺跡』(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書第87集
堀川石印遺跡	(財)北海道埋蔵文化財センター 2002 『堀川石印遺跡—日地区—』(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書第190集
西島松3遺跡	(財)北海道埋蔵文化財センター 2008 『恵庭市 西島松3・西島松5遺跡(5)』(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書第488集
函館宮原4地点	志立函館博物館 1977 『函館宮原4地点・中野遺跡』函館宮原遺跡調査委員会 函館市教育委員会 1990 『函館A遺跡』 戸井町教育委員会 1991 『函館A遺跡』
花岡2遺跡	(財)北海道埋蔵文化財センター 2000 『長万町 花岡2遺跡・花岡3遺跡』(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書第139集
長岡A遺跡	戸井町教育委員会 1991 『函館A遺跡』
ハマナス野遺跡	南茅渚町教育委員会 1975 『ハマナス野遺跡調査報告書—縄文時代前期の集落址』 南茅渚町教育委員会 1976 『ハマナス野遺跡調査報告書—縄文時代前期の集落址』 南茅渚町教育委員会 1981 『ハマナス野Ⅱ』 南茅渚町教育委員会 1984 『ハマナス野Ⅲ』 南茅渚町教育委員会 1990 『ハマナス野遺跡vol.XⅡ』 南茅渚町埋蔵文化財調査団 1991 『後編B遺跡・ハマナス野遺跡』南茅渚町埋蔵文化財発掘調査報告書第2編 南茅渚町教育委員会 1992 『ハマナス野遺跡vol.XⅣ』 南茅渚町埋蔵文化財調査団 1993 『八木A遺跡・ハマナス野遺跡』南茅渚町埋蔵文化財調査報告書第4編 南茅渚町埋蔵文化財調査団 1995 『八木A遺跡Ⅱ・ハマナス野遺跡』南茅渚町埋蔵文化財調査報告書第5編 南茅渚町教育委員会 2002 『八木C遺跡・ハマナス野遺跡vol.XⅤ』 八雲町教育委員会 2004 『浜松3遺跡』北海道埋蔵文化財センター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書3
浜松3遺跡	富良野市教育委員会 1999 『東9遺跡8遺跡』富良野市文化財調査報告書第15編
東9遺跡8遺跡	富良野市教育委員会 1999 『東9遺跡8遺跡』富良野市文化財調査報告書第15編
東山1遺跡	岩内町教育委員会 1958 『東山遺跡』 岩内町教育委員会 2004 『東山1遺跡』
フゾウ貝塚	(財)北海道埋蔵文化財センター 1991 『余市町 フゾウ貝塚』(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書第72集
蛇内遺跡	本谷町教育委員会 2001 『本谷町 蛇内遺跡』 本谷町教育委員会 2004 『蛇内遺跡』
ヘロカウス遺跡	泊村教育委員会 1997 『ヘロカウス遺跡—G地点』
茂原3遺跡	松前町教育委員会 1979 『茂原3遺跡調査報告』
茂沼地4遺跡	北斗市教育委員会 2015 『茂沼地4遺跡』 (財)北海道埋蔵文化財センター 2006 『森町 森川3遺跡(2)』(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書第234集
森川3遺跡	(財)北海道埋蔵文化財センター 2006 『森町 森川3遺跡(2)』(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書第234集
森嶋遺跡	南茅渚町埋蔵文化財調査団 1993 『八木A遺跡・ハマナス野遺跡』南茅渚町埋蔵文化財調査報告書第5編
八木A遺跡	南茅渚町埋蔵文化財調査団 1995 『八木A遺跡Ⅱ・ハマナス野遺跡』南茅渚町埋蔵文化財調査報告書第5編 南茅渚町埋蔵文化財調査団 1997 『八木A遺跡Ⅲ・八木C遺跡』南茅渚町埋蔵文化財調査報告書第6編 函館市教育委員会、特定非営利活動法人函館市埋蔵文化財事業団 2010 『函館市八木A遺跡』函館市教育委員会、特定非営利活動法人函館市埋蔵文化財事業団発掘調査報告書第6編
安達5遺跡	南茅渚町教育委員会 2001 『安達5遺跡』
山崎3遺跡	(財)北海道埋蔵文化財センター 2002 『八雲町山崎3遺跡・山崎4遺跡』(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書第166集
山崎4遺跡	(財)北海道埋蔵文化財センター 2002 『八雲町山崎4遺跡』(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書第166集
山崎5遺跡	(財)北海道埋蔵文化財センター 2002 『八雲町山崎5遺跡』(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書第165集
リヤムナイ3遺跡	(財)北海道埋蔵文化財センター 2005 『共和町リヤムナイ3遺跡(1)』(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書第230集 (財)北海道埋蔵文化財センター 2006 『共和町リヤムナイ3遺跡(2)』(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書第227集
若葉の森遺跡	帯広市教育委員会 2004 『帯広・若葉の森遺跡』帯広市埋蔵文化財調査報告書第24編
鷺ノ木遺跡	森町教育委員会 2008 『鷺ノ木遺跡』森町埋蔵文化財調査報告書第14集

事務局で十分な校正がなされ、執筆者の方々には大変ご迷惑をおかけしました。

特別史跡三内丸山遺跡発掘調査報告書一覧（県教委発行分）

年度	書名	思理蔵文化財報告書	内 容
1976 (昭和51)	近野遺跡発掘調査報告書(Ⅲ) 三内丸山(Ⅱ)遺跡発掘調査報告書 —青森県総合運動公園建設関係発掘調査—	第33集	昭和51年度に調査した県総合運動公園西駐車場地区の調査報告
1978 (昭和53)	近野遺跡発掘調査報告書(Ⅳ) —青森県総合運動公園建設関係発掘調査—	第47集	昭和52年度に調査した近野地区の調査報告
1993 (平成5)	三内丸山(2)遺跡Ⅱ —県営運動公園拡張事業に係る埋蔵文化財 発掘調査報告書1—	第157集	平成4年度に調査した旧野球場建設予定地3塁側スタンド地区検出遺構
	三内丸山(2)遺跡Ⅲ —県営運動公園拡張事業に係る埋蔵文化財 発掘調査概報1—	第166集	平成4～5年度の調査概要報告
1994 (平成6)	三内丸山(2)遺跡Ⅳ	第185集	平成6年度に調査した旧サッカー場建設予定地の試掘調査報告
1995 (平成7)	三内丸山遺跡Ⅴ —第1次～4次調査報告書—	第204集	平成7年度に実施した第1次～4次調査の報告
	三内丸山遺跡Ⅵ	第205集	平成4～7年度の調査概要報告
1996 (平成8)	三内丸山遺跡Ⅶ —第5次～7次調査概要報告書—	第229集	平成8年度に実施した第5次～7次調査の概要報告
	三内丸山遺跡Ⅷ —第6鉄塔地区調査報告書1—	第230集	平成4～5年度に調査した第6鉄塔地区の検出遺構及び第Ⅲ～Ⅴc層の調査報告
1997 (平成9)	三内丸山遺跡Ⅸ —第6鉄塔地区調査報告書2—	第249集	平成4～5年度に調査した第6鉄塔地区の第Ⅵa・Ⅵb層及び自然科学分野の調査報告
	三内丸山遺跡Ⅹ —旧野球場建設予定地発掘調査報告書2—	第250集	平成4～6年度に調査した旧野球場建設予定地の検出遺構のうち縄文時代の竪穴住居跡に関する調査報告
	三内丸山遺跡ⅩⅠ —第5次～7次調査報告書—	第251集	平成8年度に実施した第5次～7次調査の報告
	三内丸山遺跡ⅩⅡ —第8次～10次調査概要報告書—	第252集	平成9年度に実施した第8次～10次調査の概要報告
1998 (平成10)	三内丸山遺跡ⅩⅢ —第11次～13次調査概要報告書—	第265集	平成10年度に実施した第11次～13次調査の概要報告
1999 (平成11)	三内丸山遺跡ⅩⅣ —第14次～16次調査概要報告書—	第282集	平成11年度に実施した第14次～16次調査の概要報告
	三内丸山遺跡ⅩⅤ —旧野球場建設予定地発掘調査報告書3—	第283集	平成4～6年度に調査した旧野球場建設予定地の検出遺構のうち縄文時代の竪穴住居跡に関する調査報告
	三内丸山遺跡ⅩⅥ —旧野球場建設予定地発掘調査報告書4—	第288集	平成4～6年度に調査した旧野球場建設予定地の検出遺構のうち縄文時代の竪穴住居跡に関する調査報告
2000 (平成12)	三内丸山遺跡ⅩⅦ —第6鉄塔地区調査報告書3—	第289集	平成4～5年度に調査した第6鉄塔地区の遺構外遺物に関する調査報告
	三内丸山遺跡ⅩⅧ —第17次～19次調査概要報告書—	第309集	平成12年度に実施した第17次～19次調査の概要報告
2001 (平成13)	三内丸山遺跡ⅩⅧ —第20次～22次調査概要報告書—	第337集	平成13年度に実施した第20次～22次調査の概要報告
	三内丸山遺跡ⅩⅩ —第8次・9次調査報告書—	第338集	平成9年度に実施した第8次・9次調査の報告
	三内丸山遺跡21 —第23次～25次調査概要報告書—	第361集	平成14年度に実施した第23次～25次調査の概要報告
2002 (平成14)	三内丸山遺跡22 —第13次・14次・17次・20次調査報告書—	第362集	平成11～13年度に実施した第13次・14次・17次・20次調査の報告
	特別史跡三内丸山遺跡一部損傷事故に係る 発掘調査報告書	第363集	南西の墓域での遺構一部損傷事故を受けた、遺存状況の確認調査報告
	三内丸山遺跡23 —第23・26次調査報告書—	第381集	平成14・15年度に実施した第23次・26次調査の報告
2003 (平成15)	三内丸山遺跡24 —第13・14・17・20次調査報告書—	第382集	平成11～13年度に実施した第13次・14次・17次・20次調査の遺構外遺物に関する報告
	三内丸山遺跡25 —旧野球場建設予定地発掘調査報告書5 埋設土器編—	第383集	平成4～6年度に調査した旧野球場建設予定地の検出遺構のうち縄文時代の埋設土器に関する調査報告

年度	書名	照理蔵文化財報告書	内 容
2004 (平成16)	三内丸山遺跡26 —第10次・11次・12次・15次・16次・22次調査報告書—	第404集	平成9・10・11・13年度に実施した第10次・11次・12次・15次・16次・22次調査の報告
	三内丸山遺跡27 —旧野球場建設予定地発掘調査報告書6 土坑編—	第405集	平成4～6年度に調査した旧野球場建設予定地の検出遺構のうち縄文時代の埋設土器・土坑に関する調査報告
	三内丸山遺跡28 —第27・28次調査報告書—	第406集	平成16年度に実施した第27次調査の概要報告・第28次調査の報告
2005 (平成17)	三内丸山遺跡29 —第19・25・27・29次調査報告書—	第422集	平成12・14・16・17年度に実施した第19・25・27・29次調査の報告
	三内丸山遺跡30 —旧野球場建設予定地発掘調査報告書7 掘立柱建物跡編(1)—	第423集	平成4～6年度に調査した旧野球場建設予定地の検出遺構のうち縄文時代の掘立柱建物跡に関する調査報告1
2006 (平成18)	三内丸山遺跡31 —第18・21・24次調査報告書—	第443集	平成12・13・14年度に実施し第18・21・24次調査の報告
	三内丸山遺跡32 —旧野球場建設予定地発掘調査報告書8 掘立柱建物跡編(2)—	第444集	平成4～6年度に調査した旧野球場建設予定地の検出遺構のうち縄文時代の掘立柱建物跡に関する調査報告2
2007 (平成19)	三内丸山遺跡33 —第30次調査報告書—	第462集	平成18年度に実施した第30次調査の報告
	三内丸山遺跡34 —旧野球場建設予定地発掘調査報告書9 掘立柱建物跡編(3)・南盛土(1)—	第463集	平成4～6年度に調査した旧野球場建設予定地の検出遺構のうち縄文時代の掘立柱建物跡に関する調査報告3と南盛土に関する調査報告1(拡張トレンチ部分)
2008 (平成20)	三内丸山遺跡35 —旧野球場建設予定地発掘調査報告書10 南盛土(2)—	第478集	平成4～6年度に調査した旧野球場建設予定地の検出遺構のうち南盛土に関する調査報告2
2009 (平成21)	三内丸山遺跡36 —第31・32次調査報告書—	第494集	平成19・20年度に実施した第31・32次調査の報告
2010 (平成22)	三内丸山遺跡37 —旧野球場建設予定地発掘調査報告書11 写真図版編—	第509集	平成4～6年度に調査した旧野球場建設予定地の既報告の検出遺構・出土遺物の写真図版編
	三内丸山遺跡38 —旧野球場建設予定地発掘調査報告書12 北盛土(1)—	第519集	平成4～6年度に調査した旧野球場建設予定地の検出遺構のうち北盛土に関する調査報告1
2011 (平成23)	三内丸山遺跡39 —第33～35次調査報告書—	第520集	平成21～23年度に実施した第33・35次調査の報告
2012 (平成24)	三内丸山遺跡40 —旧野球場建設予定地発掘調査報告書13 北盛土(2)—	第533集	平成4～6年度に調査した旧野球場建設予定地の検出遺構のうち北盛土に関する調査報告2
	三内丸山遺跡41 —旧野球場建設予定地発掘調査報告書14 北の谷(1)—	第546集	平成4～6年度に調査した旧野球場建設予定地の検出遺構のうち北の谷に関する調査報告1
2014 (平成26)	三内丸山遺跡42 —旧野球場建設予定地発掘調査報告書15 北の谷(2)—	第557集	平成4～6年度に調査した旧野球場建設予定地の検出遺構のうち北の谷に関する調査報告2
	三内丸山遺跡43 —第36・37・38・39次調査、北端部子備調査報告書—	第570集	平成24・25・26・27年度に実施した第36・37・38・39次調査及び北端部子備調査の報告
2016 (平成28)	三内丸山遺跡44 —総括報告書 第1分冊—	第588集	三内丸山遺跡の総括報告書
2017 (平成29)	三内丸山遺跡44 —総括報告書 第2分冊—		

旧野球場建設予定地発掘調査報告書

年度	書名	照理蔵文化財報告書	内 容
1996 (平成8)	近野遺跡V —県総合運動公園拡張整備事業にかかる遺跡試掘調査報告—	第216集	県総合運動公園拡張計画に伴う試掘調査報告
2004 (平成16)	近野遺跡Ⅶ —県立美術館及び県道里見丸山線建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—	第394集	平成13～15年度に実施した近野地区の調査報告
2005 (平成17)	近野遺跡Ⅷ —県立美術館及び県道里見丸山線建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—	第418集	平成13～15年度に実施した近野地区の水場遺構の調査報告

報告書抄録

ふりがな	さんないまるやまいせき よんじゅうよん
書名	三内丸山遺跡 4 4
副書名	総括報告書 第2分冊
巻字	
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第588集
編者著名	岡田康博・小笠原雅行・齋藤 岳・永嶋 豊・茅野嘉雄・岩田安之・齋藤慶史・葉天唯正・藤原有希・佐藤真弓・長谷川大樹
編集機関	青森県教育庁文化財保護課
所在地	〒030-8540 青森市新町二丁目3番1号 TEL. 017-734-9924
発行年月日	西暦2018年3月16日

ふりがな	ふりがな	コード		日本測地系 (Tokyo Datum)		調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
三内丸山遺跡	青森県青森市 大字三内字丸山	02201	201021	40°	140°	—	—	既刊報告等の 総括
				48°	42°			
				40°	20°			
				世界測地系 (JGD2000)				
北緯	東経							
				40°	140°			
				48°	42°			
				50°	07°			

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
三内丸山遺跡	集落跡	縄文時代	堅穴建物跡、大型堅穴建物跡、掘立柱建物跡、大型掘立柱建物跡、道路跡、土坑墓、環状配石墓、埋設土器、配石遺構、貯蔵穴、土坑、粘土採掘穴、水場遺構、捨て場、盛土	土器、石器、土偶、岩偶、土製品、石製品、骨角器、木製品、編組製品等	縄文時代前・中期の拠点集落跡の既刊報告等の総括

要 約	三内丸山遺跡は、縄文時代前期中葉から中期末葉の大集落跡である。これまで、堅穴建物跡、掘立柱建物跡、墓、道路跡、盛土などの集落を構成する遺構が確認・調査されている。本書はこれまでの調査報告等を総括したものである。
-----	---

青森県埋蔵文化財調査報告書 第588集

三内丸山遺跡44

総括報告書 第2分冊

発行年月日 2018年3月16日
発行 青森県教育委員会
編集 青森県教育庁文化財保護課
〒030-8540 青森県青森市新町2丁目3番1号
TEL 017-722-1111(内) FAX 017-734-8280
印刷 協同印刷工業株式会社
〒035-0041 青森県むつ市金曲1-15-8
TEL 0175-22-2231 FAX 0175-22-0435

この印刷物は370部作成し、印刷経費は1部あたり7,657円（うち、県負担は3,828円）です。